

2. 大学生活の実態

(1) 履修登録と出席状況 (Q2)

「あなたは今年度の履修登録において、各学期に何講時(コマ)登録しましたか。また、週平均でみて、実際には何講時くらい出席していますか」(Q2-1)という問いに対する回答結果が図2-1-1と図2-1-2である。一週間あたりの登録講時数は、データ上では0～30までであるが、25以上については単位数と取り違えたなど記入上の誤りかと思われる。

登録講時数が集中しているのは12講時～16講時にあり全体の50.3%を占めている。最も多いのは14講時であるが、全体の平均は10.76講時となっている。一方、出席講時数も10講時～16講時であり、全体の53.2%を占めている。出席の最も多いのは14講時であるが、全体の平均は9.86講時である。これを平均登録講時数で割ると出席率は91.6%となる。ちなみに2004年第13回84.9%、2006年第14回87.4%、2008年第15回88.9%、2010年第16回(前回)89.4%となっており、出席率は年々向上している。

学部別にみると、登録講時数は平均的に9.8講時～12.8講時に分布しており、多い順に国際学部12.8講時、法学部12.3講時、理工学部11.2講時となっている。出席率でみると完成年次に達していない国際学部を除くと教育学部98.0%(前回97.8%)、人間福祉学部97.3%(91.5%)、理工学部96.4%(93.0%)、文学部95.3%(94.0%)の順に高い。続いて、社会学部92.2%(88.2%)、法学部91.1%(88.3%)、総合政策学部90.8%(90.8%)、商学部85.6%(78.3%)、経済学部83.3%(82.6%)となっている。これは前回と同様の傾向であるものの、すべての学部において出席率は向上している。中でも人間福祉学部、教育学部、国際学部の出席率が高い。

学年別にみると、登録講時数の平均が、1年生13.8講時、2年生14.2講時、3年生10.4講時、4年生5.1講時となっている。それぞれの出席率は1年生96.4%、2年生93.0%、3年生89.4%、4年生80.4%となっている。前回に比べ1年生、2年生、3年生は上がっているが4年生は前回より下がっている。不況下での就職活動が影響していると考えられる。

男女別では、男性の登録講時数11.2講時が女性の10.5講時を今回も上回っている。出席率では女性の93.3%に比べ男性の88.4%と低くなっており前回同様傾向に変化はない。

GPAとの関係をもとみると、GPA4.00～3.00の学生の登録講時数は10.4講時、GPA2.99～2.00の学生は10.6講時、GPA1.99～1.00の学生は11.2講時、GPA0.99～0.00の学生は13.4講時となり、GPAが低くなるほど、多く登録している。対して出席率はGPA4.00～3.00の学生98.1%、GPA2.99～2.00の学生93.4%、GPA1.99～1.00の学生84.8%、GPA0.99～0.00の学生84.3%とGPAが低くなるに伴い出席率が低下している。

主な入学試験の種別毎の登録講時数では一般入学試験10.6講時、センター利用入試10.1講時、推

Q2-1. あなたは今年度の履修登録において、各学期に何講時(コマ)登録しましたか(注:単位数ではありません)。また週平均でみて、実際には何講時くらい出席していますか。春学期と秋学期で数字が異なる場合は、その平均値を記入してください。

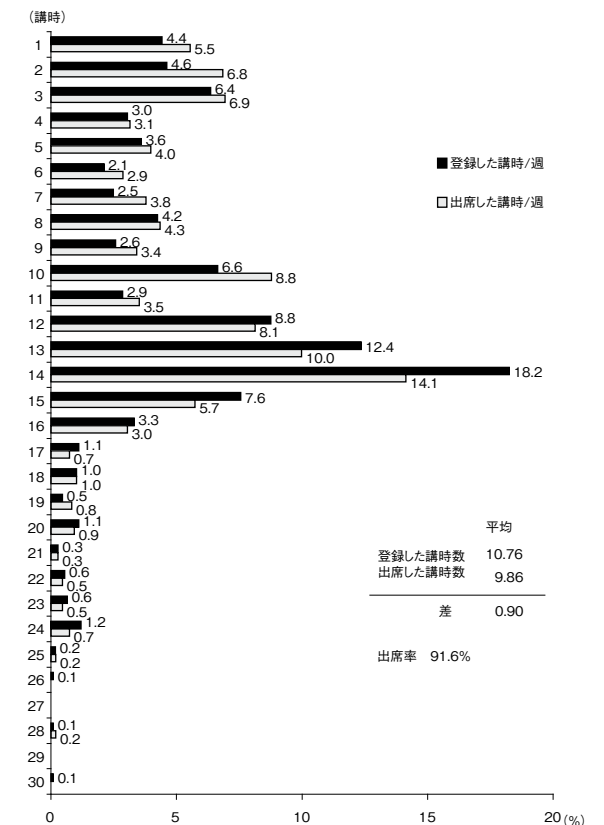
一週間に〇〇講時登録した。
一週間に〇〇講時くらい出席している。

薦入学試験10.8講時、スポーツ能力に優れた者を対象とした入学試験、または特別選抜入学試験(スポーツ活動)11.0講時、AO入学試験11.6講時となっている。出席率では一般入学試験92.5%、センター利用入試87.1%、推薦入学試験91.7%、スポーツ能力に優れた者を対象とした入学試験、または特別選抜入学試験(スポーツ活動)87.3%、AO入学試験92.2%となっている。

自宅通学生とそれ以外(自宅外)の学生では登録講時数は自宅10.7講時、自宅外10.9講時とほぼ変わらないが出席率では91.6%と92.7%となっており、自宅外通学生の出席率がやや高くなっている。

団体参加者と不参加者では登録講時数は団体参加者10.9講時、不参加者10.5講時となっているが、出席率では参加者90.8%に対し不参加者が93.3%と高くなっている。

図2-1-1 正課活動への参加:履修登録数と出席講時数(全体分布)(Q2-1)



Q2-2

「あなたは授業にはどのくらい出席しますか」という問いに対する回答結果が図2-1-3である。「履修科目のすべて出席」と回答した者が全体の平均は71.7%、「必修科目はすべて出席し、他は出席をとる科目だけ出席」10.0%、「必修科目はすべて出席し、それ以外に好きな授業科目を選んで出席」14.5%、「必修科目のみ出席」1.3%、「その他」2.5%であった。

このうち「履修科目のすべて出席」と回答した者の分布は図2-1-4である。学部別にみると教育学部95.7%、国際学部95.3%、文学部87.1%、法学部75.8%、理工学部75.3%、神学部75.0%、人間福祉学部73.1%、総合政策学部64.2%、社会学部62.9%、商学部58.3%、経済学部52.5%の順になっている。平均71.7%を下回っているのは4学部であった。

学年別では、1年生82.6%、2年生73.6%、3年生73.1%、4年生57.8%となっている。外国語等の必修科目の多い1・2年生が履修科目のすべて出席する率が高くなっている。また、3年生も同様に高いのは卒業を考えて早く単位を修得したいという意識が働いているのではないだろうか。

男女別では男性65.6%、女性76.1%と女性は大きく上回っている。これは他の出席率でも同様の結果が出ているとおりでである。なお、図2-1-5に示す通り「必修科目はすべて出席し、他は出席をとる科目だけ出席」では男性12.1%、女性8.5%と数値は逆転する。

図2-1-2 正課活動への参加：学部・学年・男女等別分布 (Q2-1)

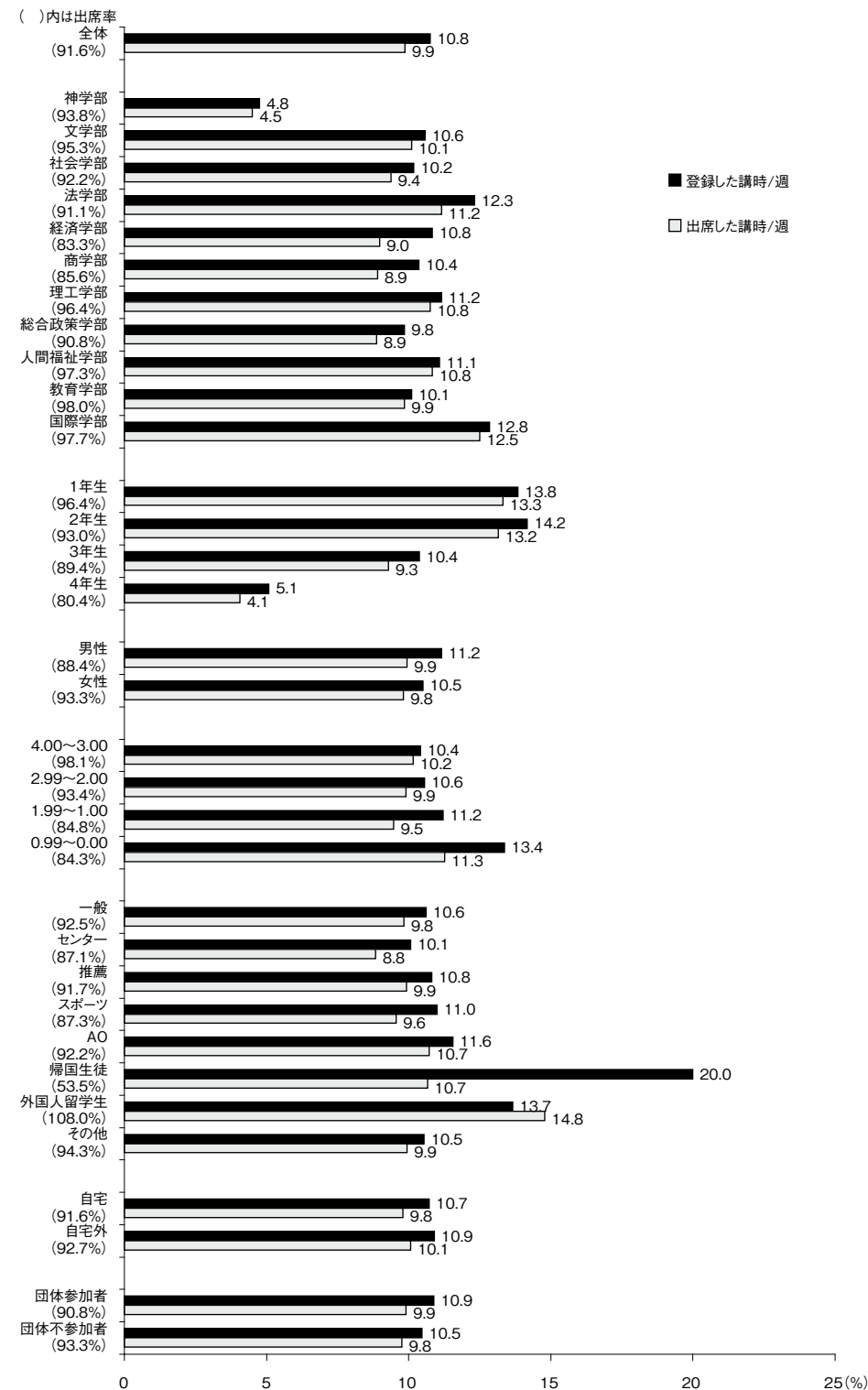
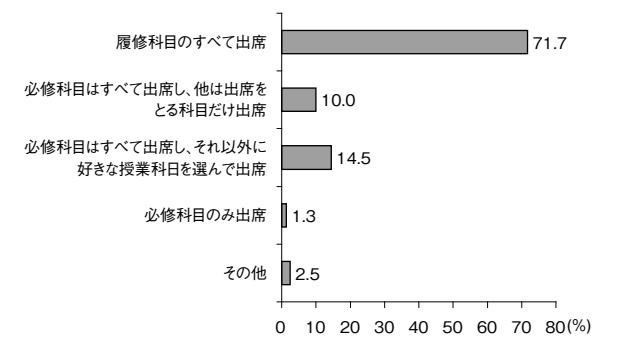


図2-1-3 正課活動への参加：授業への出席率 (全体分布) (Q2-2)



GPAとの関連をみてみると、GPA4.00～3.00の学生95.1%、GPA2.99～2.00の学生75.0%、GPA1.99～1.00の学生53.3%、GPA0.99～0.00の学生33.3%となっており、GPAの高い学生の履修科目のすべて出席する率は圧倒的に高くなっている。

主な入学試験の種別ごとにみると、履修科目のすべて出席する者の率が一般入学試験73.1%、センター利用入学試験61.4%、推薦入学試験74.9%、スポーツ能力に優れた者を対象とした入学試験、または特別選抜入学試験(スポーツ活動)50.0%、AO入学試験73.4%となっている。スポーツ能力に優れた者を対象とした入学試験、または特別選抜入学試験(スポーツ活動)の学生が低いのは各種正課外活動との関係が心配される。

自宅生と自宅外生別では、履修科目のすべて出席する者の率が自宅生73.2%、自宅外生68.2%であった。自宅生が自宅外生を上回っている。一方他のデータ「必修科目はすべて出席し、他は出席をとる科目だけ出席」では自宅生9.2%、自宅外生11.8%、「必修科目はすべて出席し、それ以外に好きな授業科目を選んで出席」では自宅生13.9%、自宅外生16.1%となっており、いずれも自宅外生が上回っている。前回調査でも同様であり、家族と一緒に生活する自宅生が平均で授業への出席率が高いことが表れている。

団体参加者と不参加者の別では団体参加者(以下参加者)70.5%、不参加者75.2%であった。不参加者は全体平均の71.7%を上回っている。一方、項目別データでは「必修科目はすべて出席し、他は出席をとる科目だけ出席」では参加者11.0%、不参加者7.4%、「必修科目はすべて出席し、それ以外に好きな授業科目を選んで出席」では参加者15.3%、不参加者12.1%となっており参加者のほうが上回っている。前回調査でも同じ傾向がでており、団体活動との両立という面から出席率が不参加者より低い状況といえる。

「その他」の自由記述では授業への出席について「好きなときに出る」「好きな授業のみ」といった意見が寄せられている。また、「自分にとってプラスになる授業や、興味のわく授業のみ出

Q2-2. あなたは授業にはどのくらい出席しますか。

- 1 履修科目のすべて出席
- 2 必修科目はすべて出席し、他は出席をとる科目だけ出席
- 3 必修科目はすべて出席し、それ以外に好きな授業科目を選んで出席
- 4 必修科目のみ出席
- 5 その他 ()

席」といった意見もある。ただし、「ほとんど出席している」「全部出席する」「事情がなければ全て出席」との出席することを肯定的な意見も多くよせられている。

図2-1-4 正課活動への参加：授業への出席率（履修科目すべてに出席した者の比率）（Q2-2）

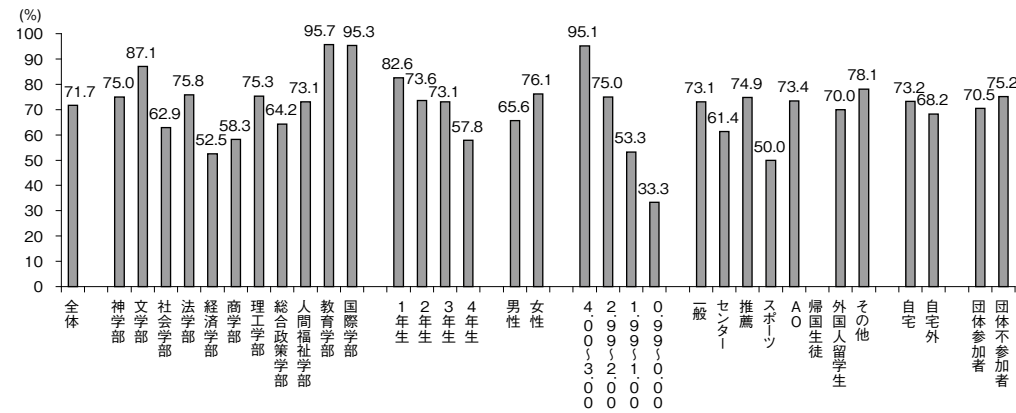
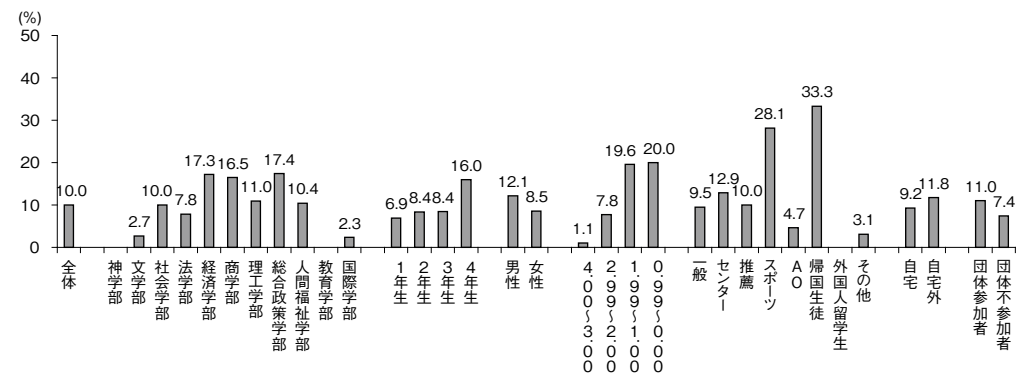


図2-1-5 正課活動への参加：授業への出席率（必修科目はすべて出席し、他は出席をとる科目だけ出席）（Q2-2）



(2) 生活時間 (Q3)

Q3では「あなたが1週間（7日間）に、下記の項目ごとに費やす時間を記入してください。」と問い、「大学の授業への出席」「授業関連の学習（予習・復習・宿題）」「授業外の学習（専門学校や習い事など）」「クラブ・サークル（課外活動時間など）」「仕事・アルバイト」「娯楽・交友」のそれぞれに費やす時間を記入してもらった。その回答結果を図2-2-1～図2-2-6に示す。

Q3-1 大学の授業への出席

「大学の授業への出席」の回答結果が図2-2-1である。授業への出席については全体で見ると20～30時間が25.4%、ついで15～20時間が18.8%、10～15時間が14.7%、5～10時間が14.5%の順になっている。

学年別にみると、1年生は20～30時間48.3%、15～20時間29.7%となっており、15～30時間の合計78.0%に上る。2年生では20～30時間41.0%、15～20時間29.1%で、15～30時間の合計は70.1%となり、3年生では20～30時間10.3%、15～20時間14.7%で15～30時間の合計は25.0%、4年生では20～30時間10.7%、15～20時間22.5%で15～30時間の合計は33.2%になる。高学年になるにしたがい20～30時間の比率が少なくなり、10～15時間の比率が増加している。ただし、授業出席が「全然ない」が各学年とも3.0～5.0%の学生がいることは検討の余地がある。

男女別では男性が最も多いのは20～30時間25.6%、次いで15～20時間18.1%、10～15時間15.7%で女性は20～30時間25.2%、15～20時間19.3%、10～15時間14.0%とほぼ同じ傾向を示している。

GPAとの関係をもてみると、GPA4.00～3.00（3.0以上）の学生は20～30時間31.8%、15～20時間17.3%、10～15時間14.0%、5～10時間14.0%で、GPA2.99～2.00（3.0未満～2.0）の学生は20～30時間27.0%、15～20時間19.4%、10～15時間13.7%、5～10時間13.0%、GPA1.99～1.00（2.0未満～1.0）の学生は20～30時間16.8%、15～20時間20.0%、10～15時間16.1%、5～10時間17.5%で、GPA0.99～0.00（1未満）の学生は20～30時間36.7%、15～20時間6.7%、10～15時間26.7%、5～10時間20.0%となっており、GPA別に10時間以上を合計するとGPA4.0～3.0が65.9%、3.0未満～2.0が63.7%、2.0未満～1.0が57.5%、1未満が70.0%になっている。

自宅とそれ以外（自宅外）の学生では全体で最も多い時間帯である20～30時間でみると自

Q3. あなたが1週間（7日間）に、下記の項目ごとに費やす時間を記入してください。

①～⑥の活動時間のみを記入し、その他の活動については記入する必要はありません。

① 大学の授業への出席 () 時間

② 授業関連の学習（予習・復習・宿題） () 時間

③ 授業外の学習（専門学校や習い事など） () 時間

④ クラブ・サークル（課外活動時間など） () 時間

⑤ 仕事・アルバイト () 時間

⑥ 娯楽・交友 () 時間

宅生24.0%に対し、親戚、知人の家45.5%、下宿25.3%、ワンルームマンション33.3%、アパート28.8%、関西学院の学生寮18.2%、その他33.3%と学生寮を除き自宅生より自宅外生のほうが授業に出席している。

通学所要時間との関係を見ると、30分未満の学生と2時間以上の学生を比較して、大きな差はみられない。通学時間と授業出席時間は関連していないといえる。

団体参加者と不参加者では、20～30時間で両者を比較すれば、参加者が26.8%で、不参加者21.4%となっており、このデータでは団体参加者が不参加者より出席率が高い結果となっている。

Q3-2 授業関連の学習（予習・復習・宿題）

「授業関連の学習（予習・復習・宿題）」の回答時間の結果が図2-2-2である。全体で見ると多い時間順に2～5時間29.2%、1～2時間19.4%、0～1時間17.4%、5～10時間15.6%、全然ない11.6%の順になっている。学部別にみても同様の分布が認められる。

学年別では1年生では、多い順に2～5時間35.1%、5～10時間19.1%、1～2時間17.4%、2年生では、2～5時間30.9%、1～2時間23.3%、5～10時間10.1%、3年生では2～5時間30.1%、1～2時間21.2%、5～10時間13.7%、4年生では、全然ない25.0%、2～5時間20.6%、0～2時間18.4%となっている。4年生では「全然ない」が25.0%となっているが、これは多くの単位を修得し終わっていることや就職活動の影響がでているものと考えられる。

男女別でみてみると、最も多い2～5時間のところで、女性が32.0%に対して男性が25.2%となっており、女性が男性を上回っている。一方、「全然ない」では男性が13.7%に対して女性は9.9%で男性が女性を上回っている。

GPAとの関係は、次の通りである。GPAの4.0～3.0においては、2時間以上の比率が他の層よりも高いことが読み取れる。

GPA	0～2時間未満	2時間以上40時間
4.0～3.0	28.3%	71.7%
3.0未満～2.0	48.6%	51.4%
2.0未満～1.0	61.0%	39.0%
1.0未満	50.0%	50.0%

住居形態別では、2～5時間が最も多くなっている点が共通しているが、その他はさまざまな結果となっている。通学所要時間との関係を見ると通学所要時間別の顕著な違いは見受けられなかった。団体参加者と不参加者では、分布に大きな違いはない。

Q3-3 授業外の学習（専門学校や習い事など）

「授業外の学習（専門学校や習い事など）」の回答時間の結果が図2-2-3である。全体でみ

ると、多い時間順に「全然ない」66.1%、2～5時間9.0%、5～10時間6.9%、1～2時間6.9%、0～1時間5.6%となっており、専門学校や習い事を全くしていない学生が過半数を占めていることがわかる。

学年別では1年生・2年生より3年生・4年生が総じて授業外の学習時間が多くなっている。資格関係など就職等を意識して学習していることが想定できる。

男性と女性ではほぼ同じような分布であり、顕著な特徴はなかった。

GPA別の「全然ない」をみると、4.0～3.0の層では57.7%、3未満～2.0で65.1%、2未満～1.0で72.6%、1.0未満で80.8%とGPAが下がるに従って増加傾向にある。

住居形態別、通学所要時間別、団体参加者と不参加者別では、その分布に大きな違いはない。

Q3-4 クラブ・サークル（課外活動時間など）

「クラブ・サークル（課外活動時間など）」の回答時間の結果が図2-2-4である。全体で見ると、多い時間順に2～5時間19.9%、5～10時間15.0%、1～2時間10.8%、10～15時間5.9%、15～20時間4.5%の順となっている。なお、「全然ない」は34.2%であり、これらの回答者はクラブ等に所属していないと推測される。学部別にみてもほぼ分布傾向は同様である。

学年別では、1年生では最も多い2～5時間が23.3%、次いで5～10時間が17.5%、1～2時間が15.4%、「全然ない」が26.0%となっており、2年生では2～5時間が21.1%、5～10時間12.9%、1～2時間12.9%、「全然ない」が27.6%で、3年生では2～5時間が17.9%、5～10時間15.6%、1～2時間7.6%、「全然ない」が40.2%で、4年生では2～5時間が16.9%、5～10時間13.5%、1～2時間6.4%、「全然ない」が44.0%で、上級生になるにしたがいクラブ・サークルに参加している時間は減っていることを示している。

男女別では、男性が0～2時間の合計が44.3%であるのに対して女性は52.7%で2～40時間以上ではその逆で55.7%と47.4%となっている。課外活動時間では男性が女性を上回っている。

GPAとの関係は、最も多い2～5時間（全体平均19.9%）での比較をしてみると以下のような結果となる。GPA4.0～3.0では20.3%で、3.0未満～2.0では19.7%、2.0未満～1.0では21.9%、1.0未満～0では13.6%となっており、1.0未満のところ全体平均を下回っている。また「全然ない」では、GPA4.0～3.0では39.5%で、3.0未満～2.0では35.1%、2.0未満～1.0では27.3%、1.0未満～0では46.4%となっており、1.0未満の層が最も多い結果となっている。

住居形態別では特徴的なことは見出せなかった。また団体参加者と不参加者別では、当然ながら団体参加者が多くの時間を使っており、不参加者の95%近くは「全然ない」となっている。

Q3-5 仕事・アルバイト

「仕事・アルバイト」の回答時間の結果が図2-2-5である。全体では5～10時間が最も多く19.0%続いて10～15時間が18.6%、15～20時間が17.1%、20～30時間が9.0%、そして2～5時間が8.0%となっている。また、「全然ない」が24.9%で4人に1人は全くアルバイト等をしていない。

学年別には1年生の「全然ない」が31.8%となっており、全体平均24.9%を大きく上回っている。

男女別にみると、男性の「全然ない」が30.5%で女性の20.9%を大きく上回っている。

GPA別でみると、「全然ない」が1.0未満～0の層で53.6%となっている点を除き、他の層では特に特徴は見当たらない。

住居形態別では自宅通学者の「全然ない」が20.6%に対してその他の住居形態では、30.0%～40.0%となっている。

通学所要時間や団体参加者、不参加者については特徴的なものは見当たらない。

Q3-6 娯楽・交友

「娯楽・交友」についての結果が図2-2-6である。全体で5～10時間が34.0%で最も多く、続いて2～5時間23.7%、10～15時間11.1%となっており、「全然ない」は3.2%であった。

学部別・学年別では大きな差異は見当たらなかった。

GPA別では、「全然ない」の1.0未満～0の層で15.4%と飛びぬけて高く、それ以外の層では、2～5%である点が特徴である。

住居形態別では、「親戚、知人の家」の学生が「全然ない」に11.1%となっており、自宅、下宿他の住居形態の数%を大きく上回っている。

通学所要時間及び団体参加者、不参加者については特徴的なことは見当たらない。

図2-2-1 大学の授業への出席 (Q3)

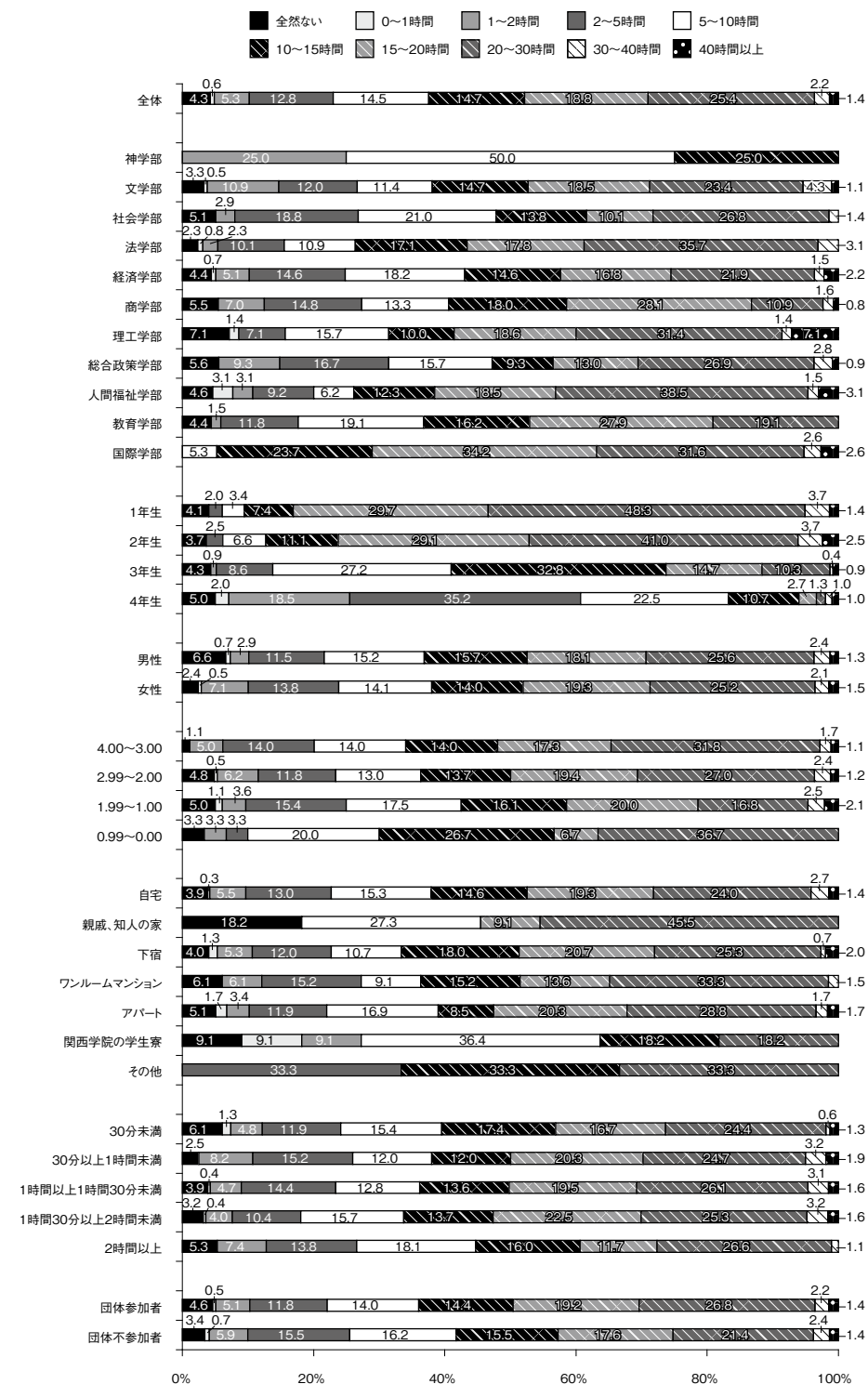


図2-2-2 授業関連の学習(予習・復習・宿題)(Q3)

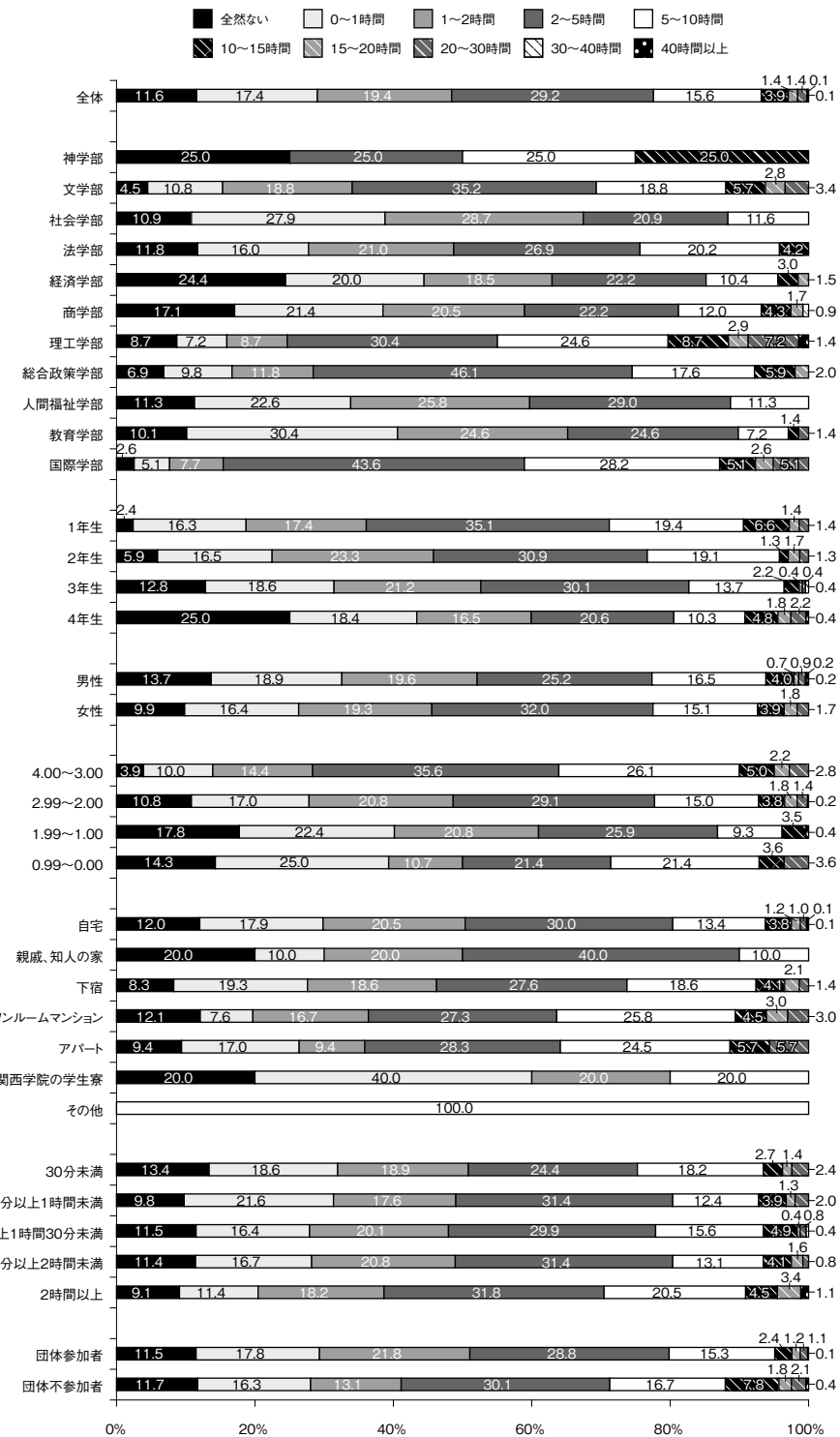


図2-2-3 授業外の学習(専門学校や習い事など)(Q3)

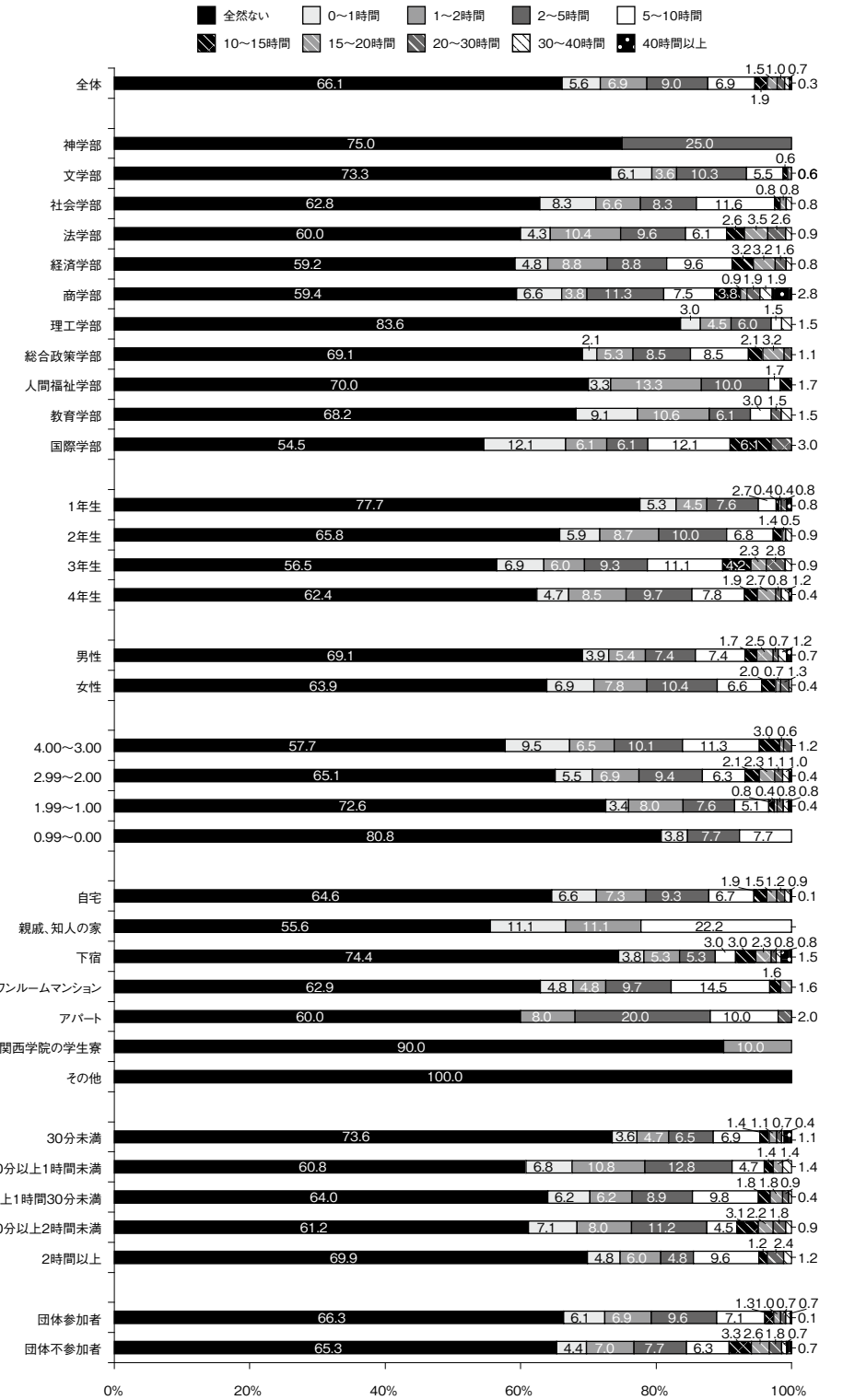


図2-2-4 クラブ・サークル（課外活動時間など）(Q3)

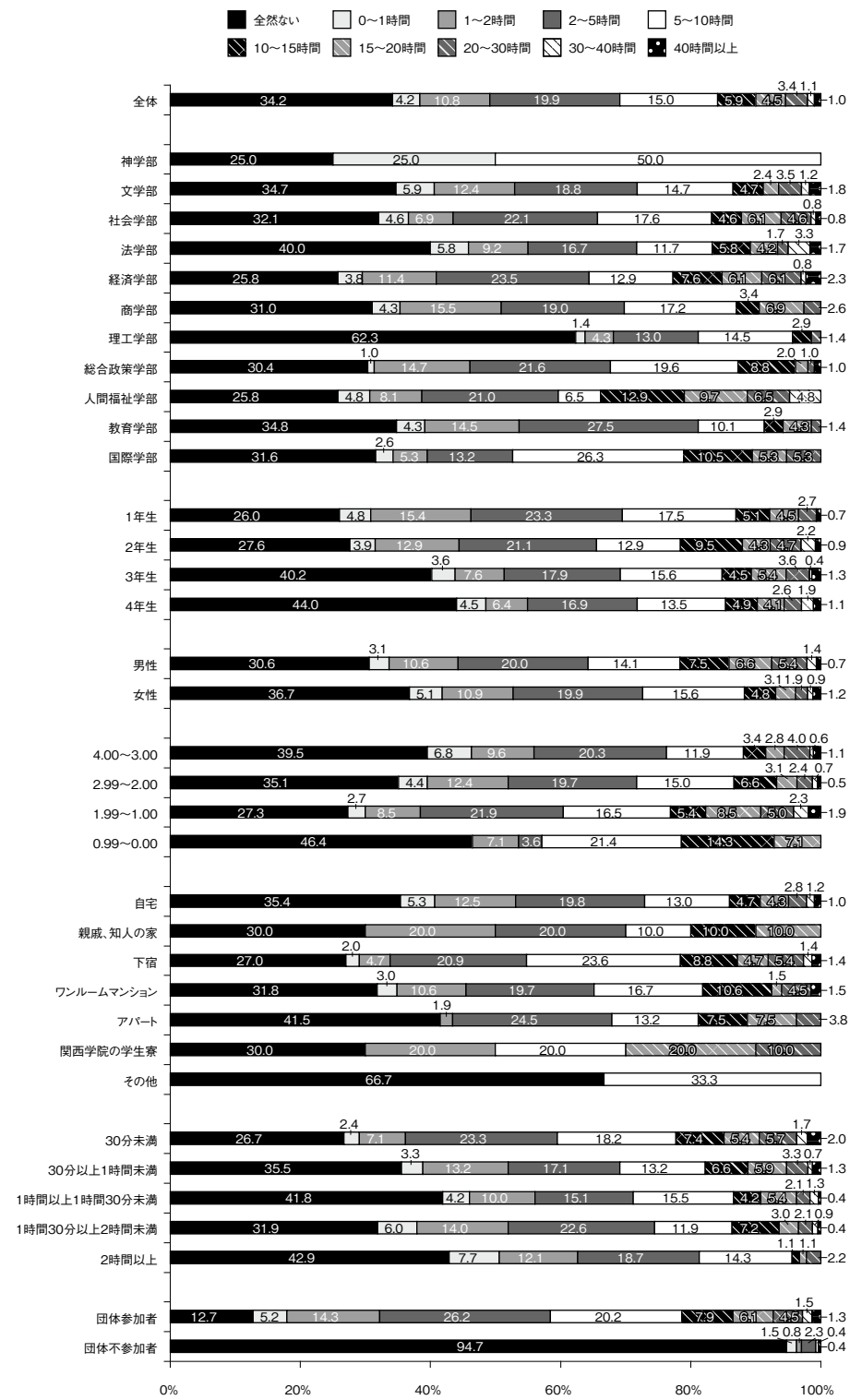


図2-2-5 仕事・アルバイト (Q3)

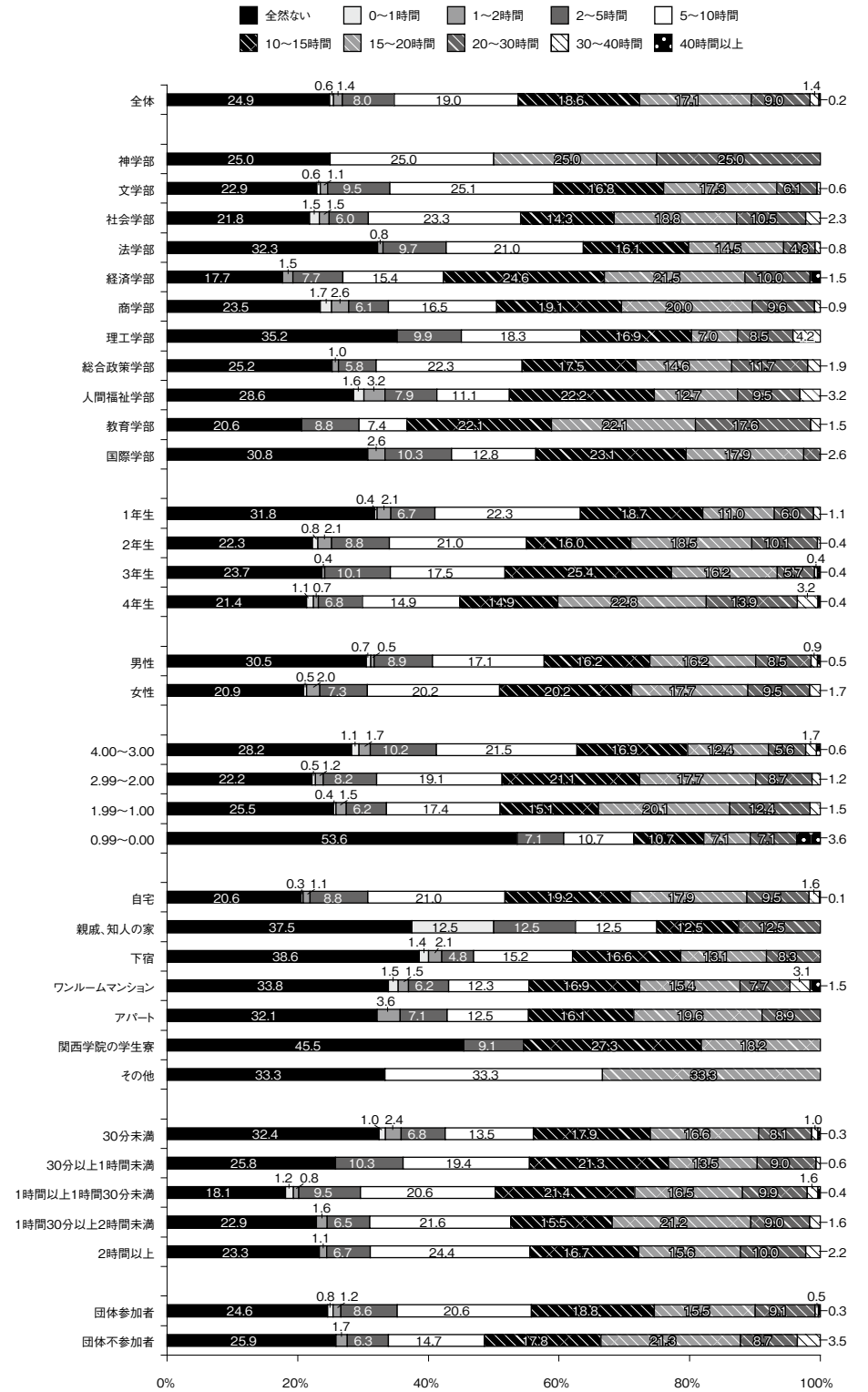
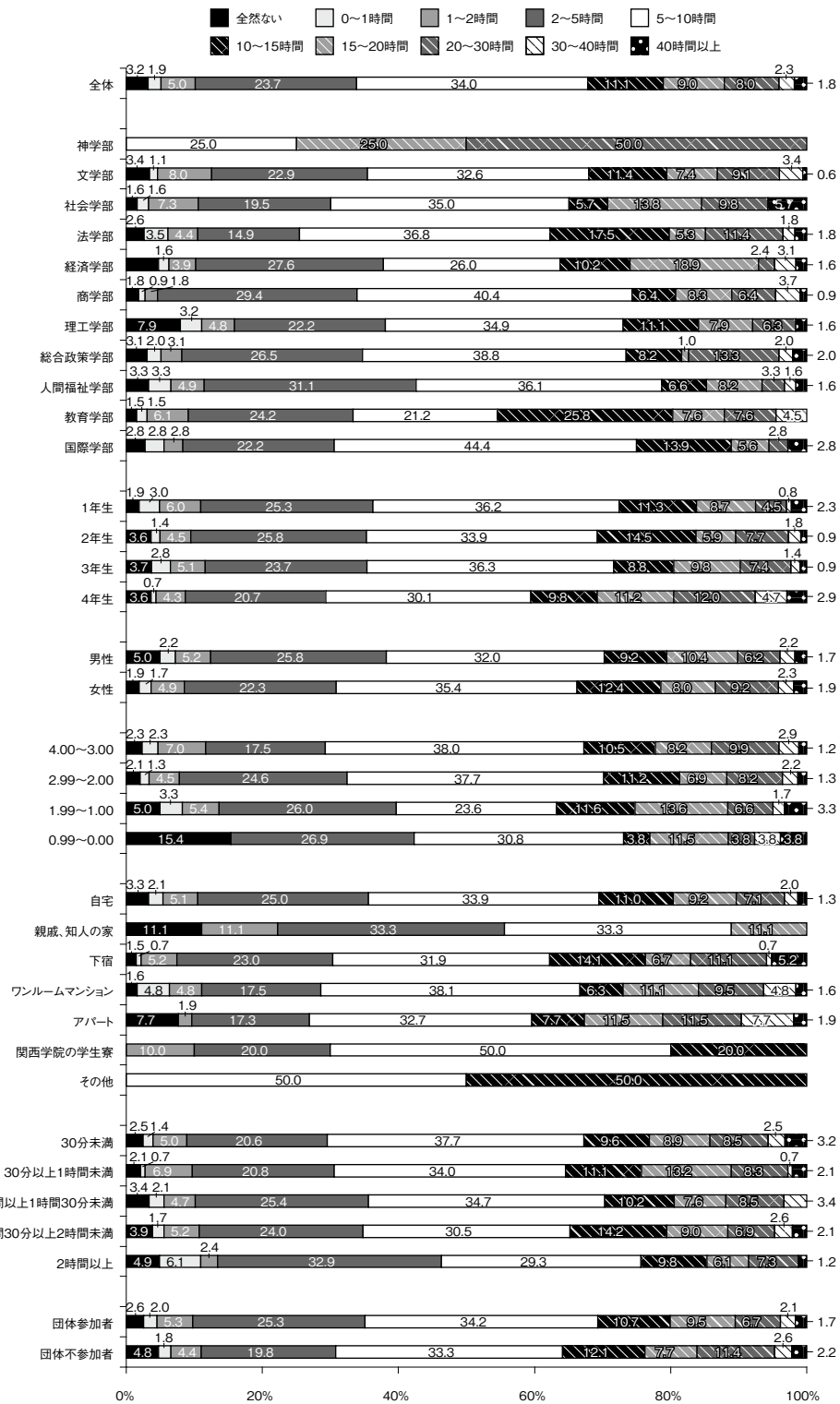


図2-2-6 娯楽・交友 (Q3)



(3) 諸活動の重視度 (Q6)

本学学生の諸活動の重視度をあきらかにするために、Q6「あなたは次の諸活動をどのくらい重視していますか」という設問を設定した。項目は「A ゼミナール」、「B 言語(外国語)科目」、「C 必修科目」、「D 必修以外の科目」、「E クラブ・サークル」、「F アルバイト」であり、評価は「全然重視していない-1」から「非常に重視している-5」の5段階の重視度を用いた。図2-3-1に項目別に5段階の重視度の割合を示す。重視度(非常+かなり)の多い順に並べると全体として「A ゼミナール」に関しては、「かなり重視している:29.3%」「非常に重視している:24.2%」であり、あわせて53.5%の学生がゼミナールを重視していることがわかる。「B 言語科目」に関しては、「かなり重視している:32.7%」「非常に重視している:23.2%」であり、あわせて55.9%の学生が言語科目を重視していることがわかる。「C 必修科目」に関しては、「かなり重視している:33.1%」「非常に重視している:26.6%」であり、あわせて59.7%の学生が必修科目を重視していることがわかる。「D 必修以外の科目」に関しては、「かなり重視している:29.9%」「非常に重視している:8.1%」であり、あわせて38.0%の学生が必修科目以外も重視していることがわかる。「E クラブ・サークル25.0+22.8=47.8%」「F アルバイト26.8+9.8=36.6%」。「あまり重視していない」では「A ゼミナール」(6.2%)、「B 言語(外国語)科目」(8.2%)、「C 必修科目」(5.7%)の1けた台であった。「まあまあ」に関しては「A ゼミナール:26.0%」、「B 言語(外国語)科目:30.6%」、「C 必修科目:31.6%」であった。「ゼミナール・言語(外国語)科目・必修科目」を「必修以外の科目」よりもやや重視している結果となった。

「A ゼミナール」についての回答結果を図2-3-2に示す。「A ゼミナール」の学年別の回答を見てみると1年生は、該当しないが18.0%(306名中55名)、2年生は、16.5%(248名中41名)であった。通常「ゼミナール」という質問に対して「研究演習」が該当すると考えがちであるが、1、2年生の8割以上が「該当しない」以外を選択し、しかも1年生は「かなり重視している:27.8%」「非常に重視している:13.4%」、2年生は「かなり重視している:32.7%」「非常に重視している:21.4%」となっている。これらの結果から各学部で行っている1年生を対象とする基礎ゼミ等や2年生を対象としたプレゼミ等を学生が重視していることがうかがえる。巷間で言われる「大学1・2年次教育の重要性」を受けて実施された基礎ゼミ等やプレゼミが学生に評価されていると言え換えることができる。

「E クラブ・サークル」の設問において「該当しない」と回答したのが15.2%(164名)であった。「あまり重視していない:12.1%(131名)」「全然重視しない:6.2%(67名)」と3つの回答の合計は33.5%(362名)であった。「まあまあ:18.8%(203名)」であり、「まあまあ」をどのように評価するか

Q6. あなたは次の諸活動をどのくらい重視していますか。
A~Fの各々について0から5までの数字を選んで○印を付けてください。

- | | |
|-------------|--------------|
| A ゼミナール | 0 該当しない |
| B 言語(外国語)科目 | 1 全然重視していない |
| C 必修科目 | 2 あまり重視していない |
| D 必修以外の科目 | 3 まあまあ |
| E クラブ・サークル | 4 かなり重視している |
| F アルバイト | 5 非常に重視している |

は、他に議論ゆだねるとして、クラブ・サークルの重視度に関して「まあまあ」がネガティブであるとするれば4つの回答の合計が52.3% (565名) となる。しかし、ここで逆に考えみると約5割の学生はクラブ・サークルをかなり以上に重視しているともいえる。半数の学生が重視している課外活動を「施策の対象とするかあるいはしない」かの初期課題設定も含めて、大学、学院全体を通じた議論の必要性をこれらの結果から指摘できる。

図2-3-3に「F アルバイト」についての回答結果を示す。アルバイトの重視度(かなり+非常に)は、女性(40.3%)のほうが男性(31.3%)よりも重視している傾向がみられた。入試形態別では、センター利用入学試験・外国人留学生入学試験該当者が「かなり重視している」以上が40%以上の回答となっているのが顕著な傾向であった。

図2-3-1 諸活動の重視度 (Q6)

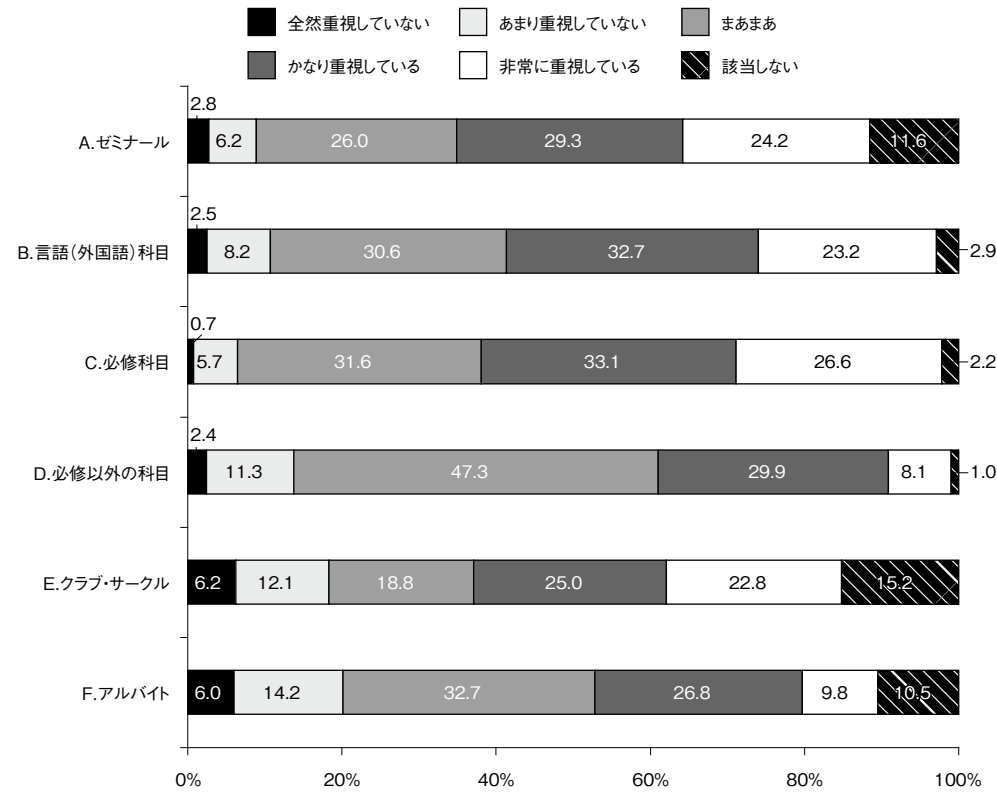


図2-3-2 諸活動の重視度 A ゼミナール (Q6)

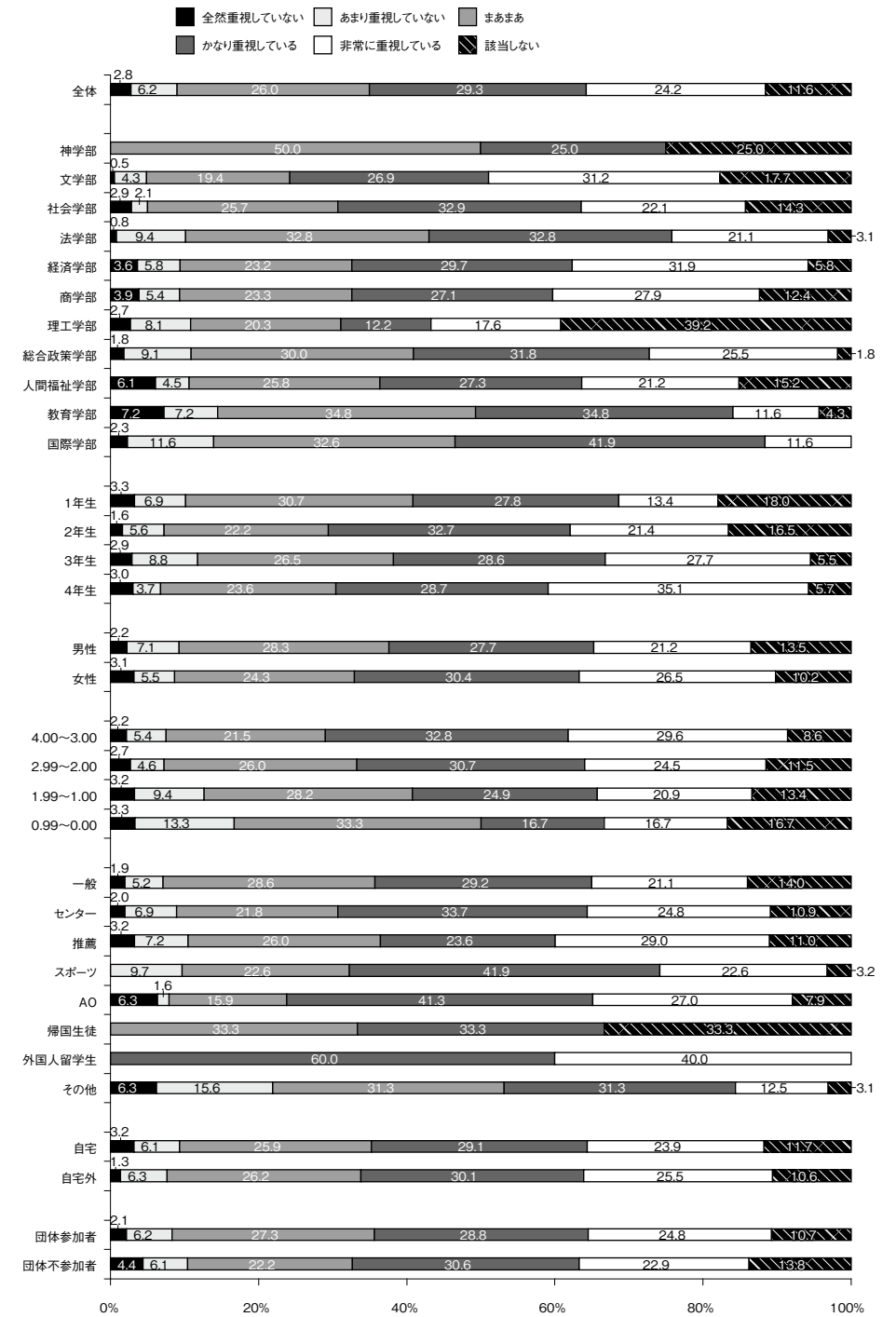
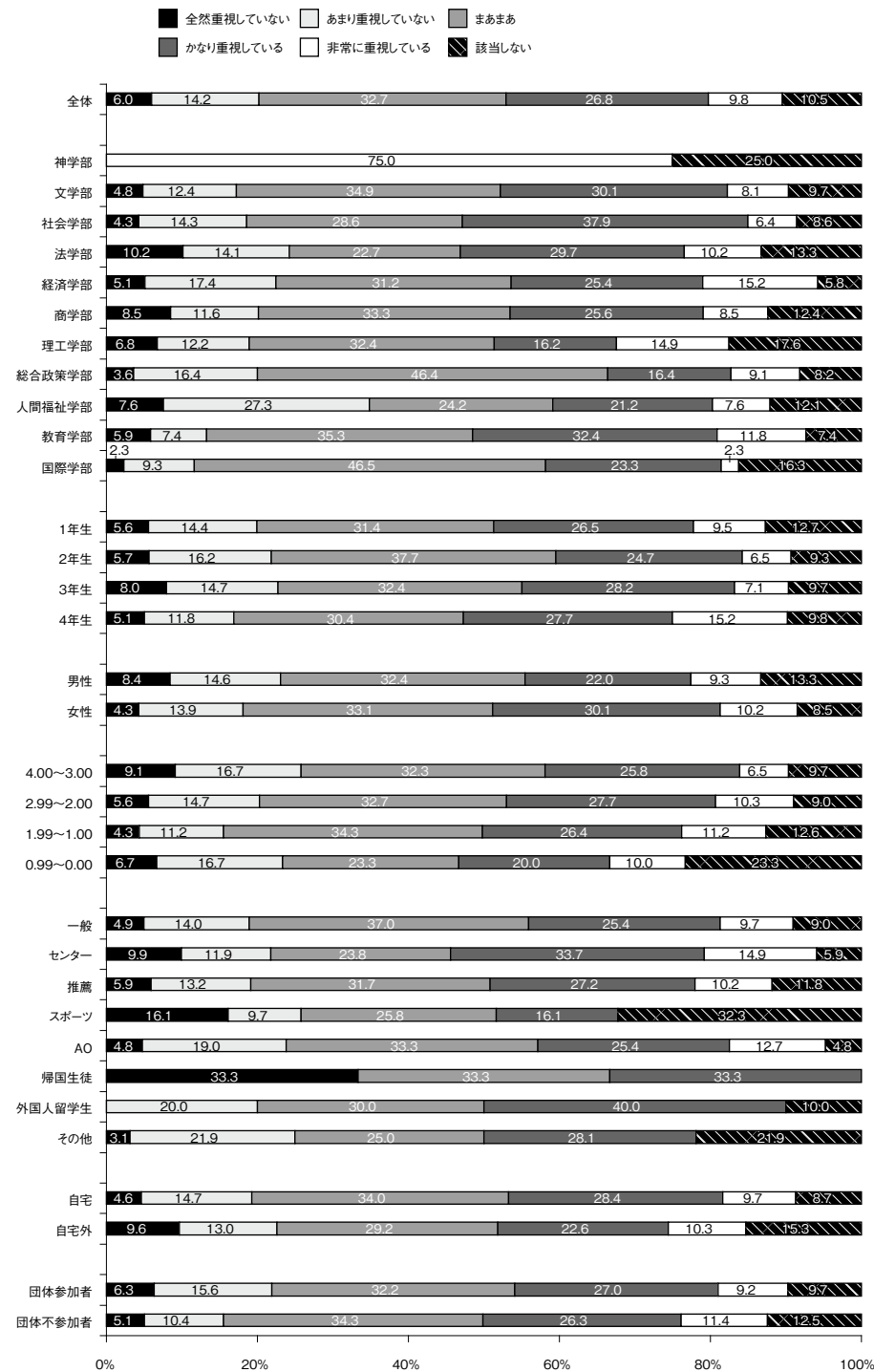


図2-3-3 諸活動の重視度 F アルバイト (Q6)



(4) 大学教員との接触 (Q14)

Q14では「あなたは大学の先生とどのくらい接していますか」という質問項目で、A.ゼミナールの先生、B.言語(外国語)の先生、C.学部の先生(A以外)、D.他学部の先生、E.クラブや同好会の顧問の先生(以下「顧問の先生」)のそれぞれについて0(該当しない)から5(非常に)までの6段階で選択してもらった。

結果は、それぞれの項目の平均値を図2-4-1に示す。今回の調査でみると、全体平均ではもつとも接触度の高いのは「ゼミナールの先生」2.99(前回2.89)であり、以下、「言語(外国語)の先生」2.33(前回2.37)「学部の先生(A以外)」1.84(前回1.99)「顧問の先生」1.82(前回1.84)「他学部の先生」1.35(前回1.33)と続く。これは前回の調査結果と同様の順位である。なお、「ゼミナールの先生」、「他学部の先生」の平均値が前回より若干高くなっている。

図2-4-2に学部別の平均値を示す。学部別の調査結果では、ゼミナールの先生に対しては、文学部、経済学部、総合政策学部、人間福祉学部、国際学部で3.00以上の平均値を示している。学部別の特徴としては、1)国際学部では「言語(外国語)の先生」に対する接触度が3.13で、全体平均2.33より0.8ポイント高いこと、2)「顧問の先生」では、人間福祉学部(2.39)、教育学部(2.10)が全体平均1.82より飛び抜けて高い、3)理工学部、人間福祉学部、教育学部、国際学部においてはゼミナール担当以外の学部の先生への接触度が全体平均より高いこと、などが特徴としてあげられる。

今回の調査では、「学年」「性別」「自宅・自宅外」「団体参加の有無」のほか、新たな項目として「F4. あなたの現在のGPAをお教えてください」「F5. あなたは、どのような入試で関西学院大学に合格しましたか」も聞いている。学生へのGPAの通知や入試形態別の追跡調査は各学部で取り組んでいることであるが、Q14の調査項目との関連で見る。GPA別の平均値を図2-4-3に示す。

GPAについては、数値が高い学生(4.00~3.00)では、顧問の先生を除いてすべての種別の先生との接触度が若干高いが、一方、比較的GPAが低い学生(1.99~1.00)でも、先生との接触度に大きな違いはないことがわかる。「顧問の先生」との接触度では、GPAの比較的低い学生において若干高い数値を示している。入試形態別の平均値を図2-4-4に示す。入試形態別にみると、いずれの項目においても高い数値を示しているのが、外国人留学生試験および帰国生徒入試による入学者となっている。ただし、両者の回答数が少ないため、はっきりした傾向とすることができない。また、スポーツ能力に優れた者を対象とした入学試験の入学者が「顧問の先生」との接触度が高いのは、調査を待つ

までもなく当然のことなのかもしれない。他の傾向としては、一般入学試験および推薦入学試験以外の種別の試験形態で入学した学生はいずれの先生とも高い接触度を示していることがみて取れる。

「学年」「性別」「自宅・自宅外」「団体参加の有無」

Q14. あなたは大学の先生とどのくらい接していますか。
A~Eの各々について0から5までの数字を選んで○印を付けてください。

A ゼミナールの先生	0 該当しない
B 言語(外国語)の先生	1 ほとんどない
C 学部の先生(A以外)	2 あまりない
D 他学部の先生	3 普通
E クラブや同好会の顧問の先生	4 かなり
	5 非常に

(図2-4-5～図2-4-8)によるクロス集計では全体の平均値と比較して特に目立つ点はない。前回の調査と比較しても、著しい傾向の差は認められなかった。

図2-4-1 大学教員との接触度 (Q14)

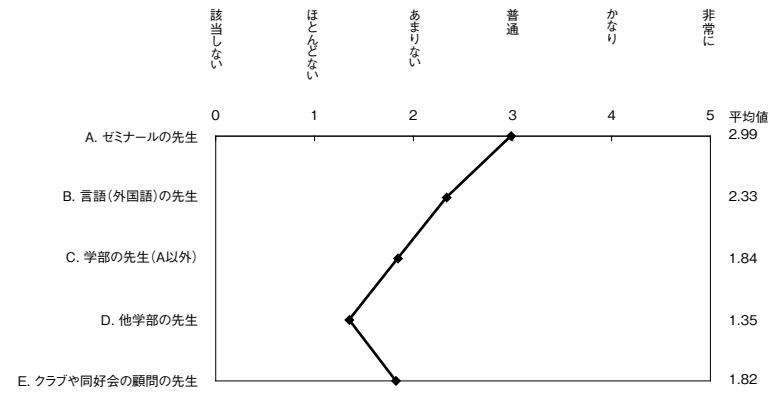


図2-4-2 学部別大学教員との接触度 (Q14)

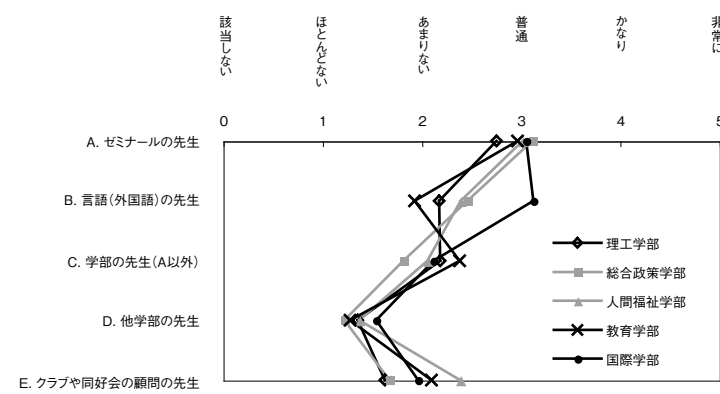
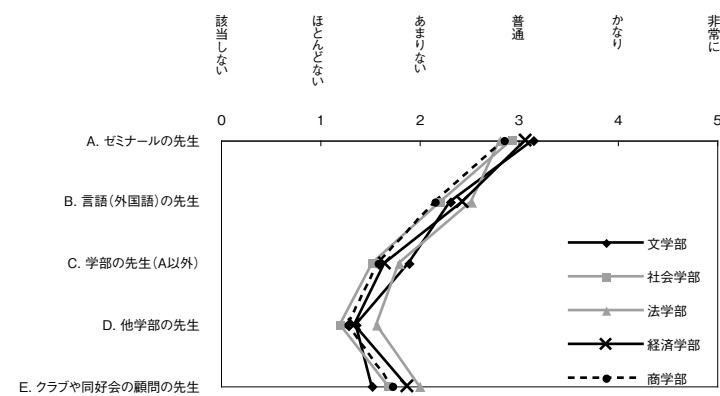


図2-4-3 GPA別大学教員との接触度 (Q14)

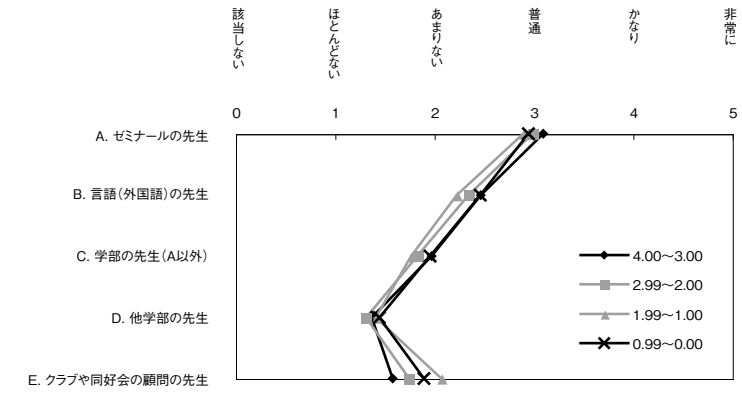


図2-4-4 入試形態別大学教員との接触度 (Q14)

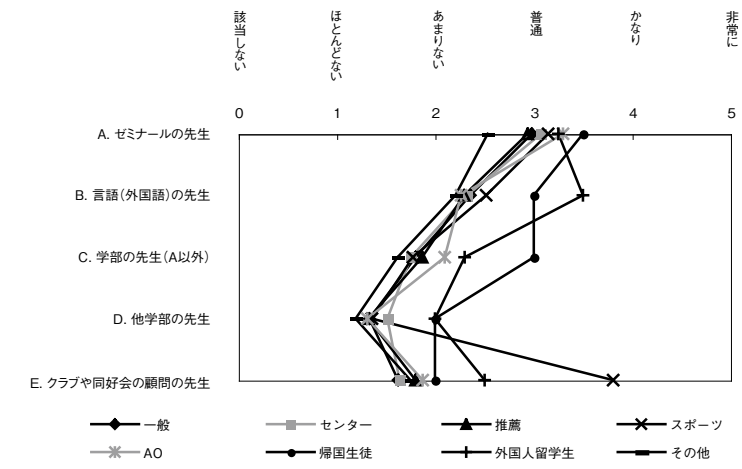


図2-4-5 学年別大学教員との接触度 (Q14)

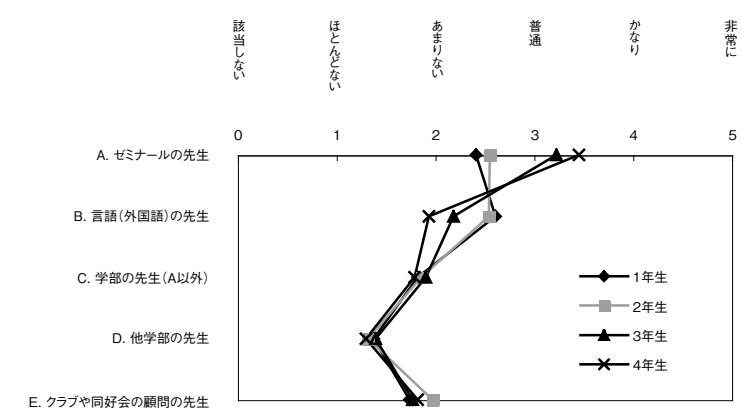


図2-4-6 男女別大学教員との接触度 (Q14)

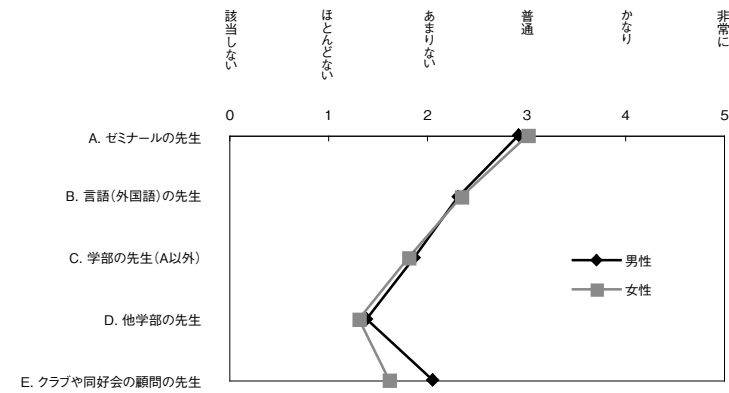


図2-4-7 自宅・自宅外別大学教員との接触度 (Q14)

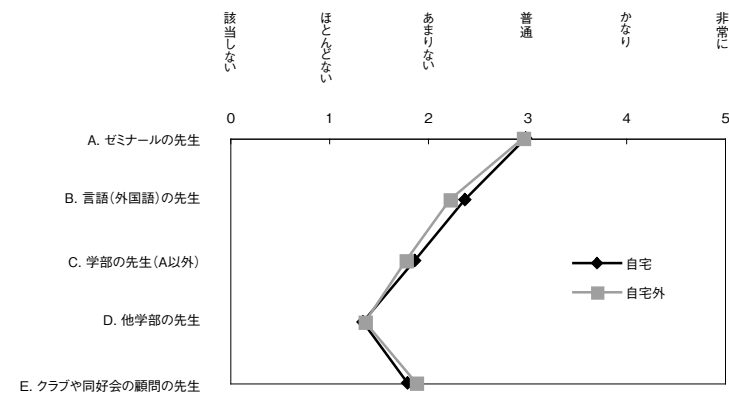
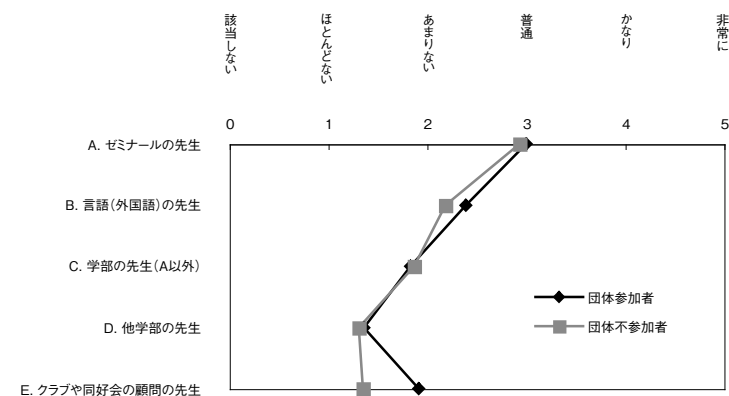


図2-4-8 団体参加・不参加別大学教員との接触度 (Q14)



(5) 留学生や外国人教職員との接触 (Q20)

Q20では「あなたは留学生や外国人教職員と接する機会がありますか」という質問項目を立てた。この質問は今回新設した項目である。図2-5-1に回答結果を示す。

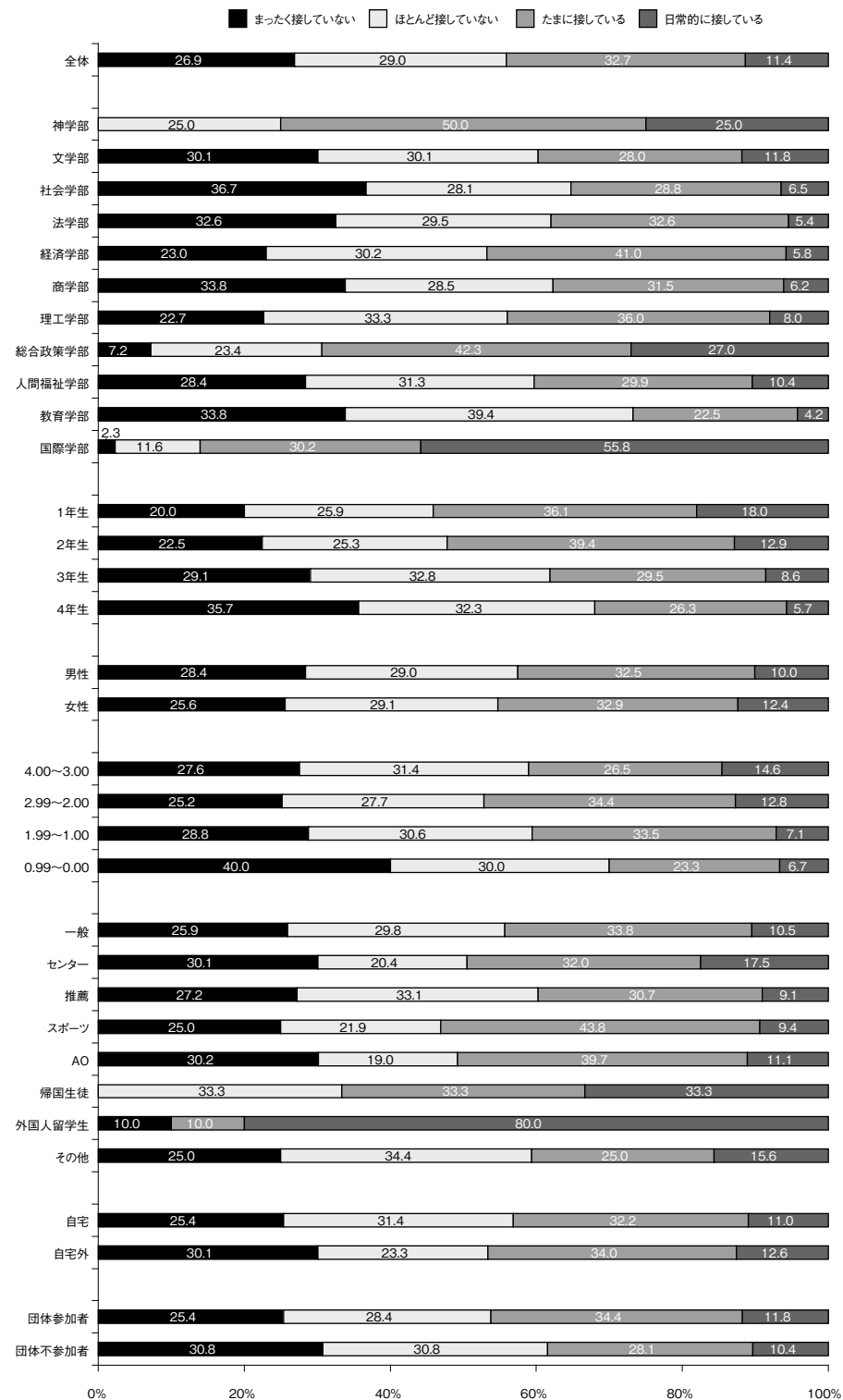
まず全体の集計を見ると、「たまに接している」(32.7%)、「日常的に接している」(11.4%)で「接触がある」が合計44.1%の学生が外国人となんらかの接触をもっているのに対し、「まったく接していない」(26.9%)、「ほとんど接していない」(29.0%)で「接触がない」が合計55.9%と、依然半数以上の学生が外国人との接触をほとんど持っていないことがわかる。留学生の数も、外国人教職員の数も学部によって大きく異なることからすれば、所属学部によって接触の度合いが変わるのは当然であろう。実際、「接触がある」の数値において、留学生や外国人教職員が比較的多い学部では、国際学部86.0%、総合政策学部69.3%と著しく高い。また、「日常的に接している」を選択する学生が国際学部では、半数を超えている。これはネイティブ教員による外国語による授業の多さも関連していると思われる。

学年別の集計では、1、2年生での接触の数値が高く、3、4年生では低くなっていることが分かる。これは1、2年生では日常的な授業、特に外国語の授業が多いことが主な理由と考えられる。この調査項目については、男女の別ではほとんど差がない。GPA別でも、数値の高い学生と低い学生の間には、この数値に関しては大きな差はない。入試形態別では、AO入試、スポーツ推薦入試、帰国生徒入試、外国人留学生入試について、いずれも「接触がある」(日常的に接している+たまに接している)が「接触がない」(まったく接していない+ほとんど接していない)を上回るが、後三者については回答数がわずかであり、除外して考えるべきであろう。自宅か自宅外かの区分では、自宅外の学生の方が外国人との接触機会がわずかに多い。また、部活動やサークル活動への所属では、所属している学生は所属していない学生に比べてかなり外国人との接触度が低いことがみて取れる。

Q20. あなたは留学生や外国人教職員と接する機会がありますか。

1	まったく接していない	3	たまに接している
2	ほとんど接していない	4	日常的に接している

図2-5-1 留学生や外国人教職員との接触度 (Q20)



(6) 親しい友人 (Q7)

親しい友人の人数とその友人らとの接触頻度に関しては、前々回調査以降、継続して質問している。今回もQ7-1で質問をした回答結果を図2-6-1、図2-6-2に示す。全体として、親しい友人の数は多い順に「4~6人」34.3%、次いで「10人以上」32.9%、「1~3人」16.6%、「7~9人」14.8%となっている。一方、親しい友人は「いない」1.4%（実数で15人）となっている。これは前回調査とまったく同様の傾向を示していた。

所属学部別に見ると、「4~6人」では、神学部を除き、総合政策学部45.5%（実数50人）が最も高く、次いで商学部42.6%、人間福祉学部38.8%となっている。「10人以上」では、経済学部39.6%、国際学部39.5%、教育学部36.2%となっており、総合政策学部が23.6%（実数26人）と最も低い。「1~3人」と「7~9人」では、理工学部がそれぞれ23.0%、20.3%と全学部の中で最も多くなっている。国際学部については、「10人以上」39.5%が最も多く、次いで「4~6人」30.2%、「1~3人」16.3%、「7~9人」14.0%の順で全体平均と異なっている。

学年別では、ほぼ差異は見つからない。

男女別で見ると、男性は「10人以上」が最も多く37.0%（実数168人）、次いで「4~6人」が29.5%（実数134人）だった。一方、女性は「4~6人」が最も多く37.9%（実数240人）、次いで「10人以上」が29.9%（実数189人）となっており、前回調査と同様に親しい友人の人数は、1~9人では女性が多く、「10人以上」では男性が多い。女性は男性より少ない人数での親しい友人が多いと傾向を示している。

GPA別では、4.0~1.0では全体平均とほぼ同じ傾向を示しているが、1.0未満では、「10人以上」36.7%、「4~6人」26.7%、「1~3」20.0%、「いない」13.3%、「7~9人」3.3%となり、全体に分散している。

入試形態別による特徴は特に見当たらないが、帰国生徒入学試験で入学した学生の場合、親しい友人は「1~3人」が66.7%（実数2人）、「7~9人」が33.3%（実数1人）と答えている。回答数が3人のため参考情報にとどめる必要はあるものの、帰国生徒を取り巻く環境の一端を示しているようで、興味深い数値である。

自宅、自宅外の違いでは、ほぼ差異は見つからない。

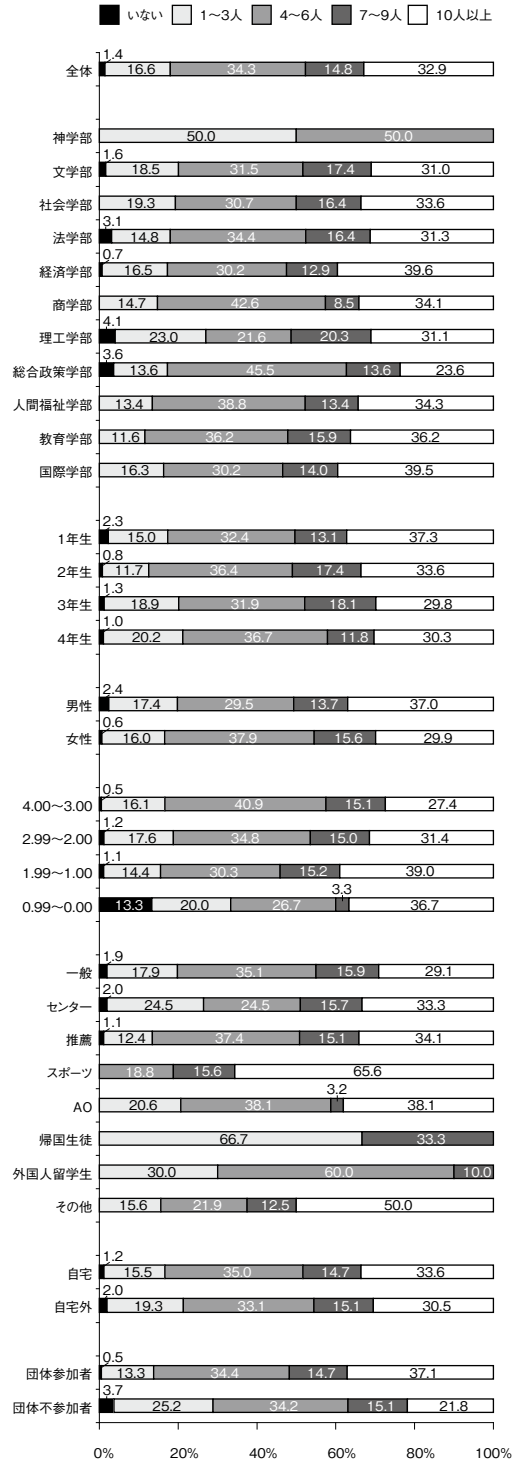
課外活動団体への所属状況で見ると、課外活動団体に所属しているものでは、親しい友人は「10人以上」が37.1%（実数293人）で最も多かった。次いで「4~6人」が34.4%（実数272人）だった。一方、課外活動団体に所属していない場合は「4~6人」が34.2%（実数102人）で最も多く、次いで「1~3人」が25.2%（実数75人）となっている。課外活動に所属することによる人間関係の広がりを示す結果だと言える。

次に親しい友人らとの接触頻度について、質問の回答結果を図2-6-3、図2-6-4に示す。全体では「2、3日に1度程度」が29.6%（実数319人）を占め、次いで「1日に1度程度」が24.2%（実数261人）で「1日に何度も」が20.6%で合計すると74.4%を占める。親しい友人間では、ほとんどが少なくとも2、3日に1

Q7-1. あなたの親しい友人は何人くらいいますか。

- 1 いない
- 2 1~3人
- 3 4~6人
- 4 7~9人
- 6 10人以上

図2-6-1 親しい友人の数 (Q7-1)



度は連絡を取っていることがわかる。

学部別でも、ほぼ同様の結果が出ているものの、教育学部は「1日に何度も」が27.5% (実数19人) で最も多く、次いで「2、3日に1度程度」が24.6% (実数17人) だったことが特徴的である。

学年別では、1年生と2年生が「1日に1度程度」が最も多いが、3年生と4年生では「2、3日に1度程度」が多くなっている。結果を図2-6-5に示す。

「自宅」か「自宅外」かの住居別や、課外活動団体に所属しているかどうかによる特徴は見出せなかった。

以上が接触頻度に関する全体状況であるが、前回調査では毎日が29.0%であったが、今回は「1日何度も」「1日1度」を合計すると44.8%となっており、携帯電話やSNSの活用が学生の間で急速に浸透しているなか、コミュニケーションの頻度は上がってきているといえる。

図2-6-2 親しい友人の数 (Q7-1)

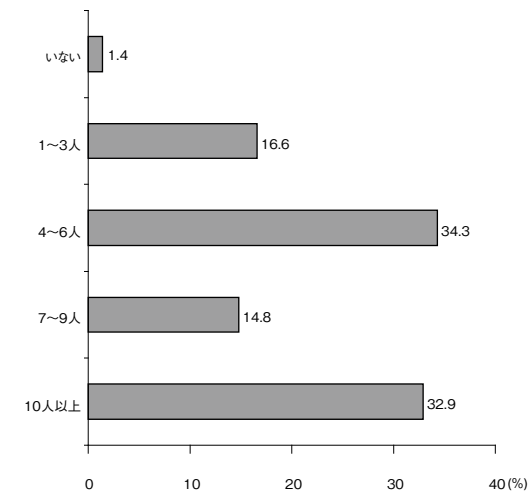


図2-6-3 親しい友人との接触度 (Q7-2)

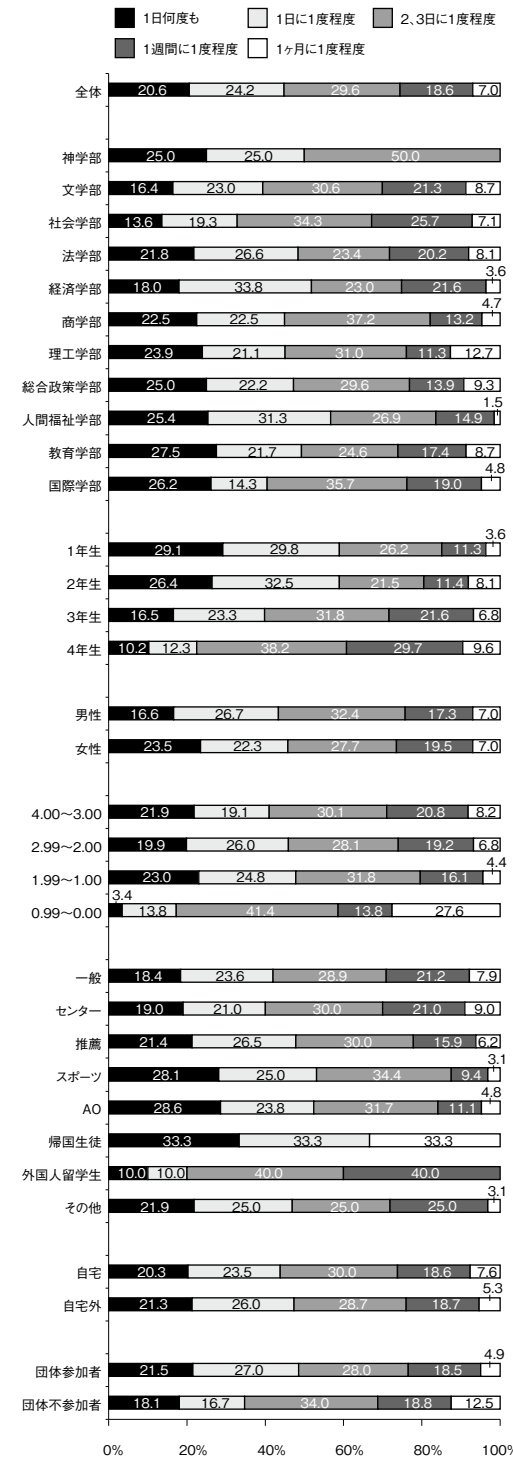


図2-6-4 親しい友人との接触度 (Q7-2)

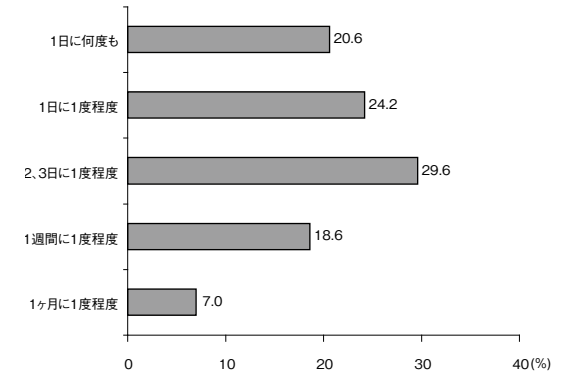
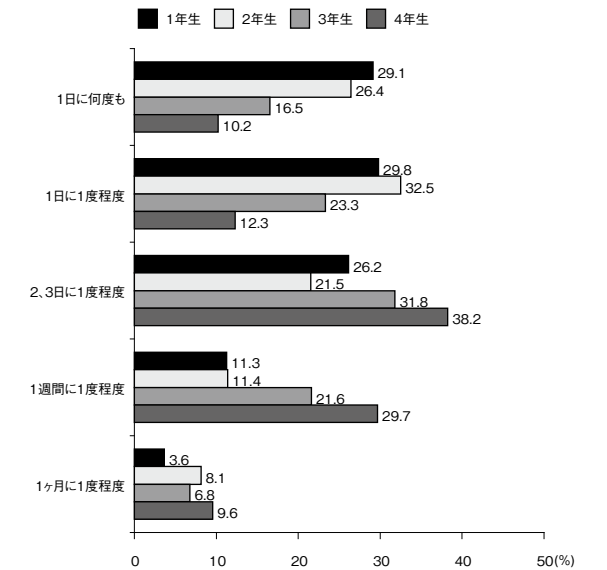


図2-6-5 学年別親しい友人との接触度 (Q7-2)



Q7-2. あなたはそれらの友人とどのくらいの頻度で連絡をとっていますか。

- 1 1日に何度も
- 2 1日に1度程度
- 3 2、3日に1度程度
- 4 1週間に1度程度
- 5 1ヶ月に1度程度

(7) 大切だと感じている人々 (Q9)

Q9では「あなたが現在もっとも大切だと感じているのは、どのような人々との関係ですか」とたずね、回答にあたっては第1位と第2位の順位をつけて2つ選択してもらった。

このカテゴリに関する質問は、前回調査と同様の項目である。第1位と第2位の回答の割合を図2-7-1と図2-7-2に示す。

もっとも大切だと感じている人々の第1位は「家族」80.3%（「第1位」65.4%+「第2位」14.9%）、第2位は「出身地や出身校を共通にする仲間」42.5%（「第1位」10.6%、+「第2位」31.9%）。次いで「クラブ・サークルの仲間」38.1%（「第1位」12.5%+「第2位」25.6%）で、前回調査と同様の結果だった。一方、「アルバイトの仲間」は6.4%（「第1位」1.5%+「第2位」4.9%）で、学生生活にアルバイトはつきもの、という前提が学生の間では成立していないのか、あるいはアルバイトを通して大切な仲間を得ることそのものを期待していない結果なのか、現代の学生気質の一面が垣間見える。さらに「寮や下宿の仲間」は2.2%（「第1位」0.8%+「第2位」1.4%）で、自宅外の学生は関学において決して多数派ではないことを勘案したとしても相当の少数派で、学生全体ではいわゆる暮らしを通して友人をつくるというライフスタイルではないことがうかがえる回答状況だった。第1位の割合を図2-7-3に示す。また、学部別の割合を図2-7-4に示す。

学部別で見ると、全学部生の第1位が「家族」を選択している。第2位は、神学部、経済学部、総合政策学部、人間福祉学部が「クラブ・サークルの仲間」としているものの、それ以外のすべての学部が「出身地や出身校を共通にする仲間」としている。

第1位の学年別の割合を図2-7-5に示す。学年別の「家族」では1年生67.2%、2年生65.5%、3年生63.7%と下降し4年生で65.2%と再び上昇している。

男女別の「家族」では、女性71.0%に対して男性は57.7%。女性が男性より「家族」をもっとも大切だと感じていることがわかる。

居住別では、「家族」が第1位は自宅65.2%、自宅外66.3%で、自宅生か自宅外生かの違いによる大きな差異はないと言える。

なお、選択肢の「その他」を第1位として全体の3.1%が選択しているが、その記述には「ボランティアで出会った仲間」や「同じ目標に向かって進む仲間」、「インターンシップでの仲間」、「心の通じた友人や自分にはないものを持っている友人」などがあり、閉塞感の募る社会状況のなか、目的意識を持って前向きに生きようとする学生たちの姿勢を読み取ることのできる記述が目をつけた。

Q9. あなたが現在もっとも大切だと感じているのは、どのような人々との関係ですか。次の中から大切な順に2つ選んで回答欄に番号で答えてください。ただし、ここで「仲間」というのは本学の学生とは限りません。

- 1 家族
- 2 出身地や出身校を共通にする仲間
- 3 寮や下宿の仲間
- 4 ゼミナールや研究室の仲間
- 5 同じ講義に出てノートや参考書を貸し借りしている仲間
- 6 クラブ・サークルの仲間
- 7 アルバイトの仲間
- 8 その他 ()

図2-7-1 重視している関係:1位 (Q9)

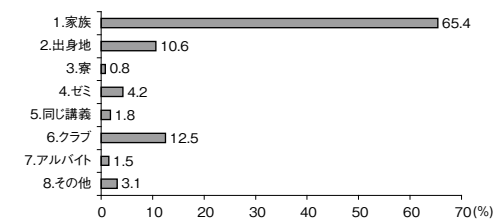


図2-7-2 重視している関係:2位 (Q9)

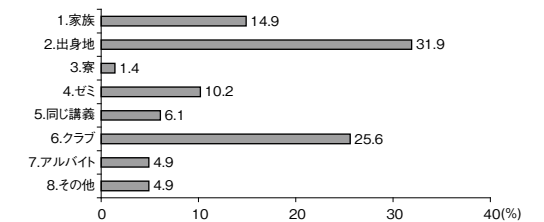


図2-7-3 重視する関係:1位 (Q9)

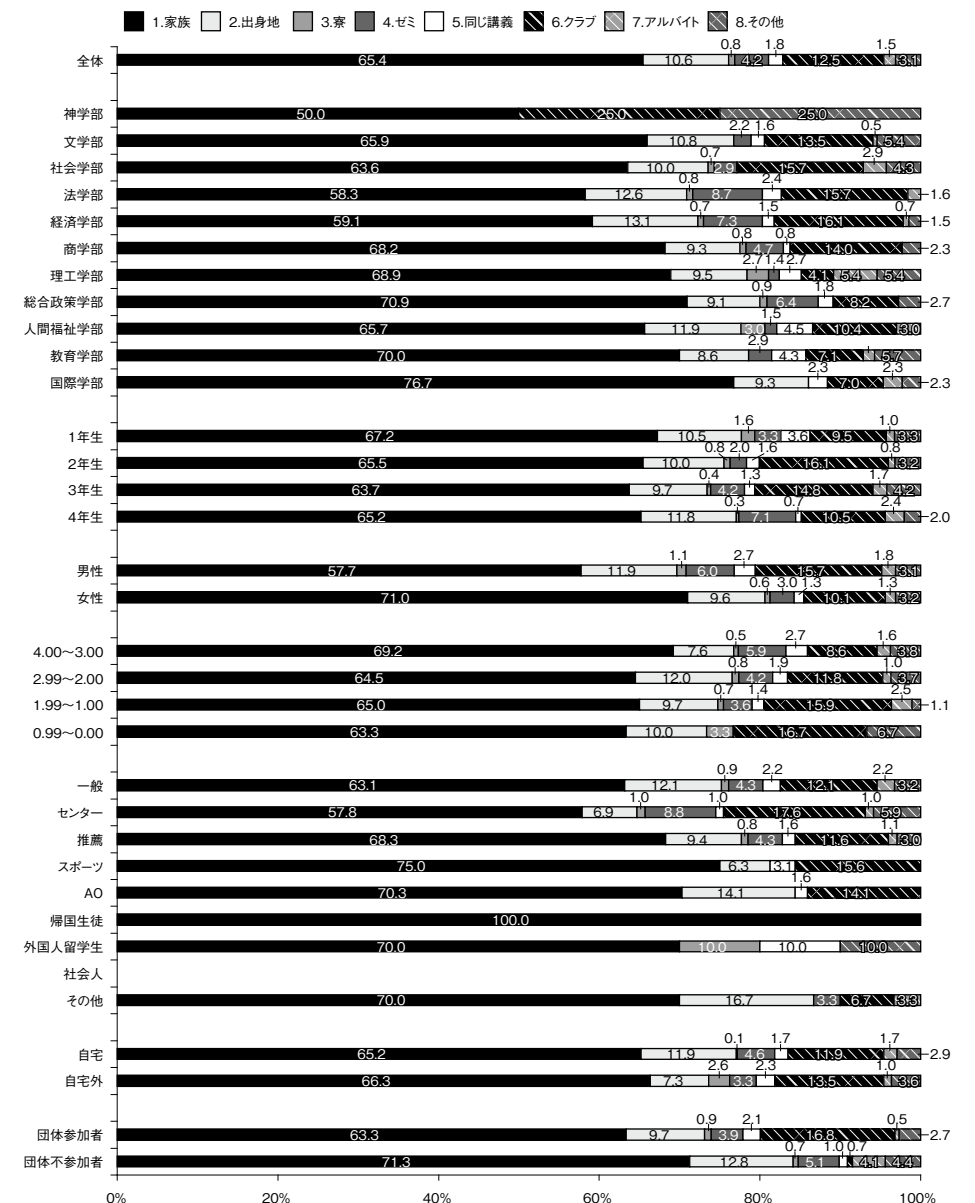


図2-7-4 学部別重視している関係:1位(Q9)

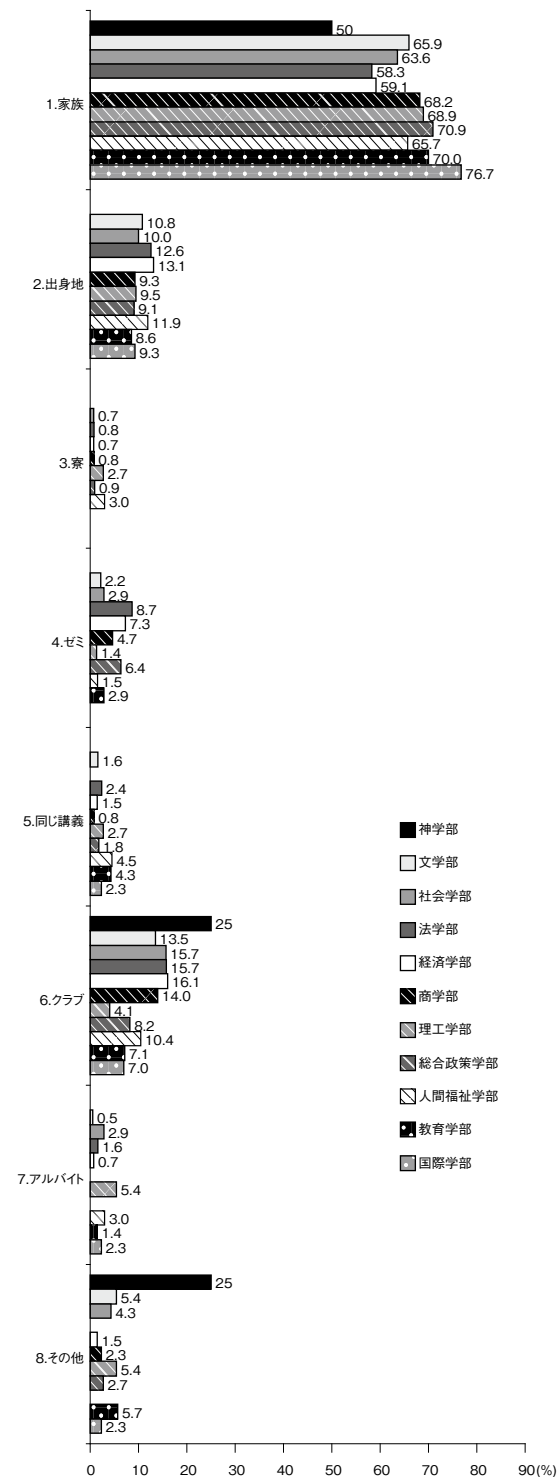
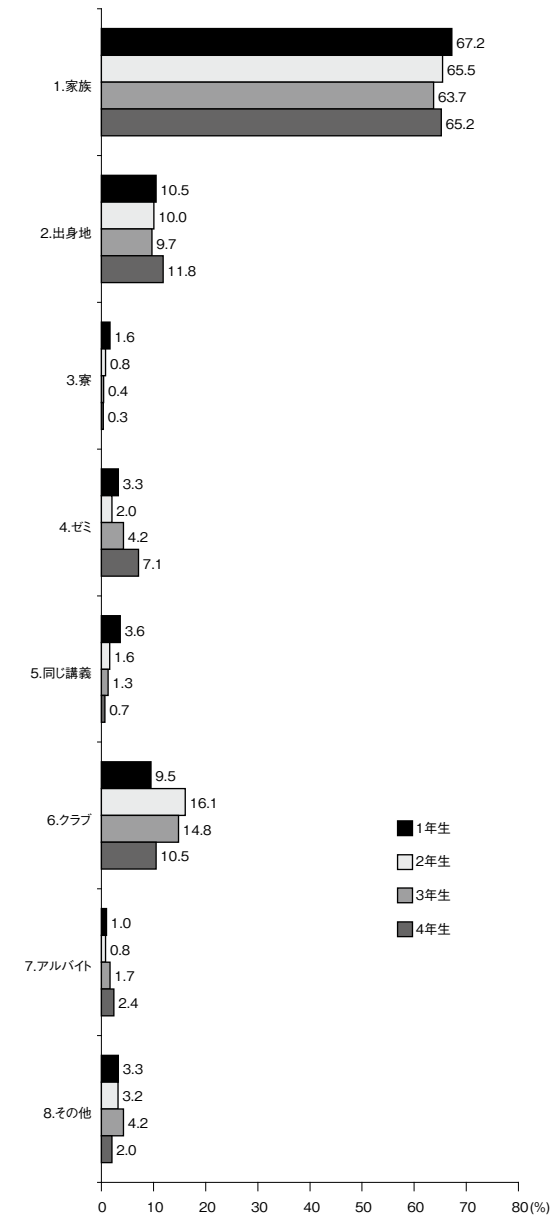


図2-7-5 学年別重視している関係:1位(Q9)



(8) 情報収集の手段(Q17)

Q17では諸活動における情報収集手段についてたずねた。図2-8-1に全体の割合を示す。全体的に見て、インターネットやスマホなどの携帯端末を利用した情報収集(以下、ネット等)が進んでおり、「D:趣味」「E:コンサート・イベント」「F:未知のところへ行く」においては7~8割の学生がまずネット等で情報を探していることがわかる。また「A:レポート課題」「B:レポートで行き詰った場合」でもおよそ半数の学生がまずネット等で情報を収集している。ただ一つの例外は「C:試験」であり、ネット等の利用は2段階目の情報収集でも20%程度で、友人や先輩・先生を情報ソースとしている傾向が伺える。なお、過去の調査と比較すると、これらの傾向はほぼ定着しているといつてよい。ただし、勉学に関するAからCの質問(「最初に」と「次に」)を勘案した計6問)のすべてにおいて、「先輩・先生」の回答が前回調査より微増していることには注意が必要であろう。

次に、情報収集別に回答の割合を図2-8-2~図2-8-8に示す。回答割合にばらつきがあり、更なる検討に価値があると考えられる設問AからCについて学部別・GPA別にみていこう。

学部ごとに「A:レポート課題」についてみると、他学部と比べて、①文学部学生は図書館利用率が高い(46.2%。全体では25.3%)、②理工学部学生は友人からの情報収集が多い(36.0%。全体では21.1%)、③社会科学系学部の学生はネット等からの情報収集が多い(53.0%。全体では47.1%)、そして④教育学部学生は図書館利用率、友人からの情報収集率の2点において

文学部と理工学部の間位置し、ネット等の利用率は両学部とはほぼ同率(30.0%)で社会科学系学部より低い、といった傾向が読み取れる。①から③については2010年調査と比べて概ね一致しているが、教育学部学生については「ネット等の利用率」の回答割合が激減している(51.3%⇒30.0%)、前回調査が完成年度前であった国際学部では回答が大きく変化している、といった変化があり、他の設問を含めこれら2学部については今後も回答が変化していくものを推察される。

「A:レポート課題」で確認できた学部間差異は「B:レポートで行き詰った

Q17. あなたは次のA~Gのような状況の時、どのような手段で情報や資料を集めますか。下の1~9の選択肢の中から最初に試みる方法と、最初の方法が十分でない場合、次に試みる方法をそれぞれ回答欄に番号で答えてください。その方法が選択肢の中に無い場合は「9 その他」とし、その具体的な方法を括弧内に書いてください。

- A 授業でレポートの課題が出た
- B レポートや論文を書いていて、行き詰った
- C 試験がある
- D 趣味に関する情報を入手したい
- E コンサートやイベント等について知りたい
- F よく知らないところに出かける
- G 旅行をする

- 1 友人に聞く
- 2 先輩・先生に聞く
- 3 家族に聞く
- 4 インターネット(パソコン)で調べる
- 5 図書館へ行って調べる
- 6 本屋へ行く
- 7 携帯電話・スマートフォンで調べる
- 8 パンフレットを集める
- 9 その他()

場合」でも同様に観察される。全学部で増加する「先輩・先生」の回答を除いて考えれば、その差異は概ね「A:レポート課題」の結果と一致するが、教育学部において「A:レポート課題」と比べ図書館利用率が急減する点は注目に値しよう（A:35.7% B:8.5%）。また、こうした差異は前回調査とも概ね同様であるが、商、教育、国際の3学部で友人からの情報収集が減少傾向にあることに留意すべきである（商:28.5%⇒19.4%、教:48.7%⇒23.9%、国:17.6%⇒11.6%）。

最後に、「C:試験」においては「A:レポート課題」と異なった差異がみられる。文学部の図書館利用率は「A:レポート課題」「B:レポートで行き詰った場合」ともトップであったが、「C:試験」の場合は国際学部が首位の座を譲り2位に後退する。また、友人からの情報を最も利用するのは商学部であり、理工学部は8位に後退する。「A:レポート課題」と「C:試験」とでは、学生の情報収集行動が大きく異なり、その差異は学部間でも異なるといえる。

次にGPA別の結果を検討する。図2-8-2～図2-8-4からわかるように、成績が低下するにつれて、①A～Cのいずれの質問においても友人を情報ソースとする割合が上昇する、②「B:レポートで行き詰った場合」にネット等を利用する割合が上昇する傾向がある。また、③GPAが1未満の学生は「B:レポートで行き詰った場合」「C:試験」とも「友人」「先輩・先生」の合計割合が低下することも確認できる。試験前やレポートで行き詰った時に周囲に情報を求めない学生には成績上位と成績下位の2タイプがあることを我々は認識すべきであろう。なお、他の属性別結果は紙幅の都合により割愛する。

最後に情報収集のために「最初に」とる手段と「次に」とる手段の関係を「A:レポート課題」についてまとめたのが表2-1、表2-2である。紙幅の都合、他の質問項目については割愛する。全体的にみて、①友人⇒ネット等⇒図書館⇒ネット等（以下、繰り返し）、あるいは単に②ネット等⇒図書館⇒ネット等（以下、繰り返し）、といった循環が予測される。これを学部別にみると、以下に示すように

情報収集のパターン

①	理工学部	友人⇒ネット等⇒図書館⇒ネット等
②	社会科学系学部	ネット等⇒図書館⇒ネット等
③	文学部	図書館⇒ネット等⇒図書館
①'	教育学部	理工学部に近い行動

最初の情報収集を友人からする学生が多い理工学部では①の傾向が、ネット等の利用率が高い社会科学系学部では②の傾向が顕著となる。一方、文学部では、最初に図書館から情報収集を行う学生が多いため、③図書館⇒ネット等⇒図書館（以下、繰り返し）といった繰り返し傾向が強く、教育学部では「最初に」で友人を選ぶ割合は低いものの、「次に」つながる行動は理工学部に近いといえる。またGPA別にみると、成績が低下するにつれ「次に」で図書館を選ぶ割合が総じて低下していくことがわかる。またGPAが1を超える層では成績の低下とともに「次に」で友人に情報を求める割合が高まるが、GPAが1未満の層では10%程度しか友人に向かわず、「最初に」とくらべ大幅に低下する（35.7%⇒10.7%）。この点は、成績下位層が勉学において周囲から孤立している可能性を示唆している。

図2-8-1 情報収集の手段（最初に）(Q17)

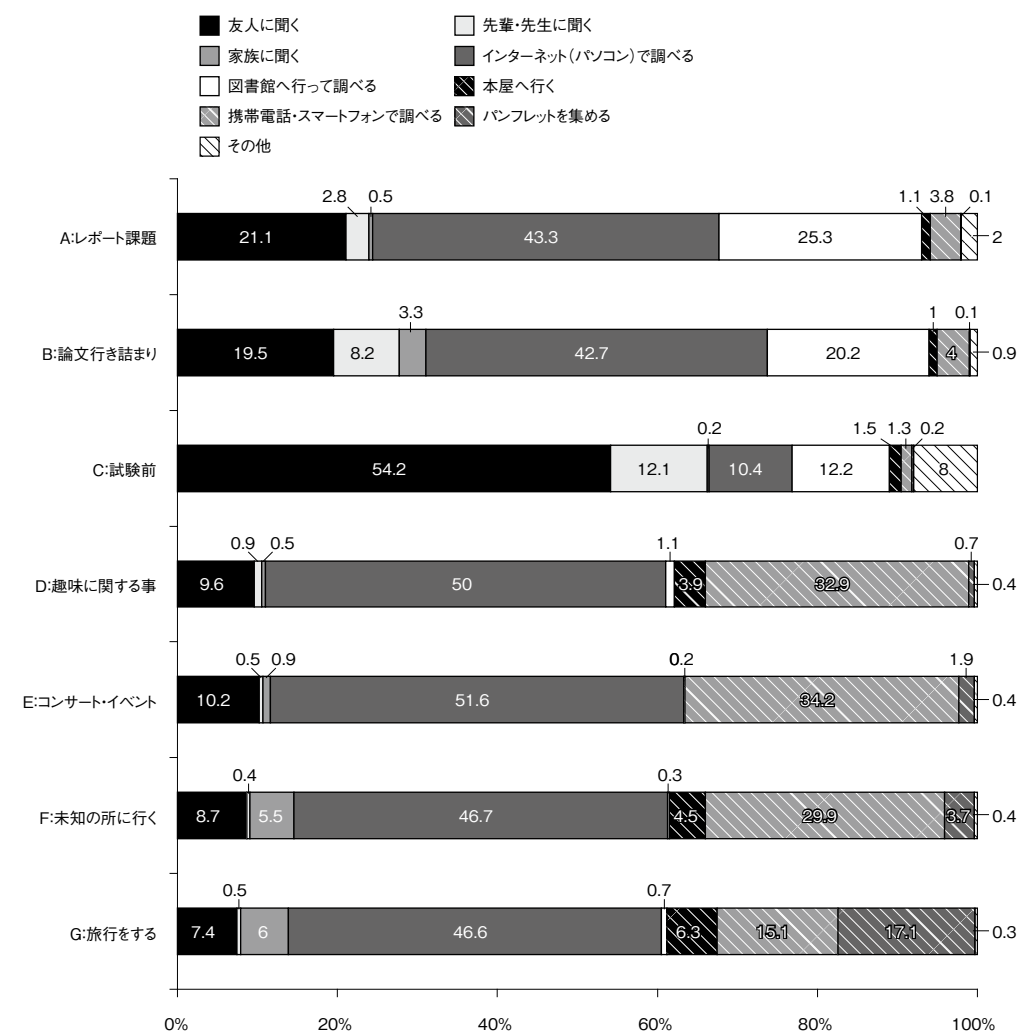


図2-8-2 情報収集法(最初に):A レポート問題(Q17)

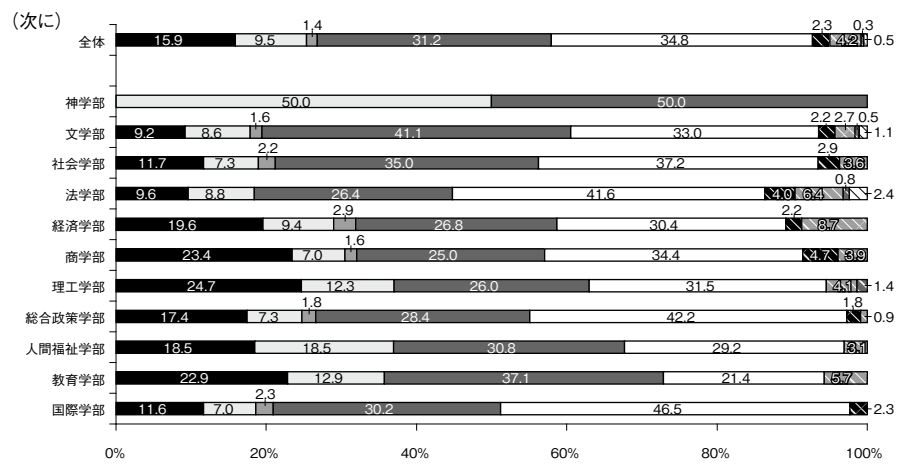
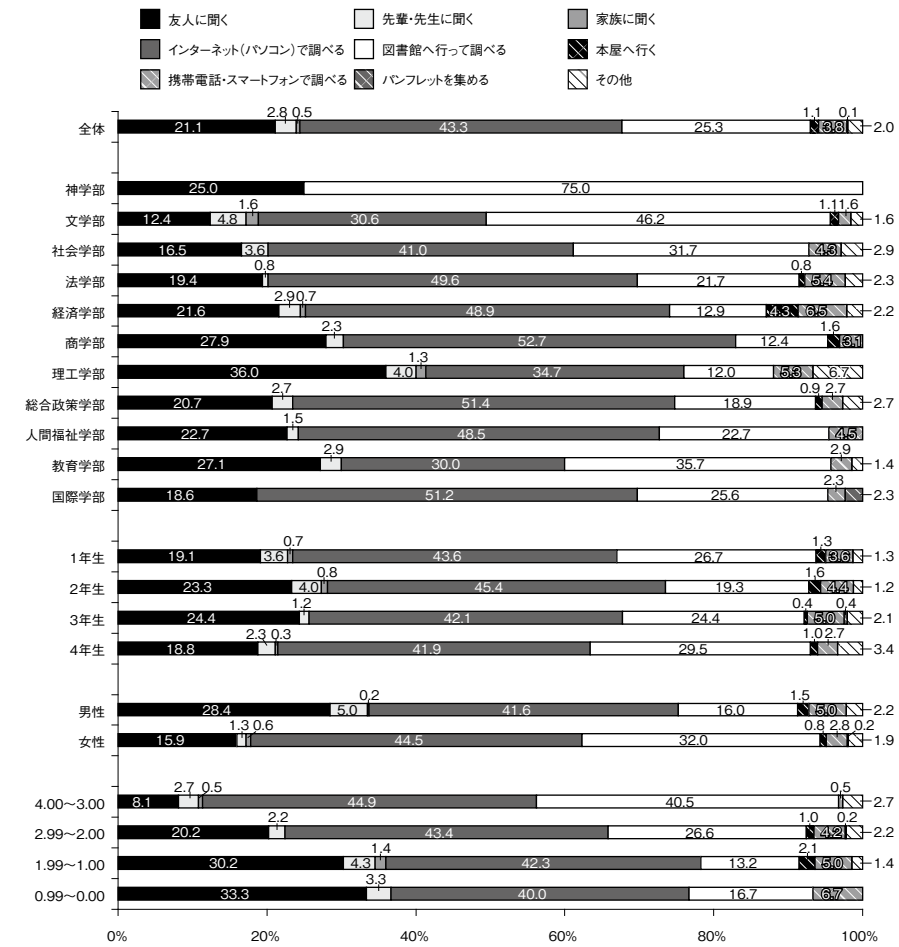


図2-8-3 情報収集法(最初に):B 論文行き詰まり(Q17)

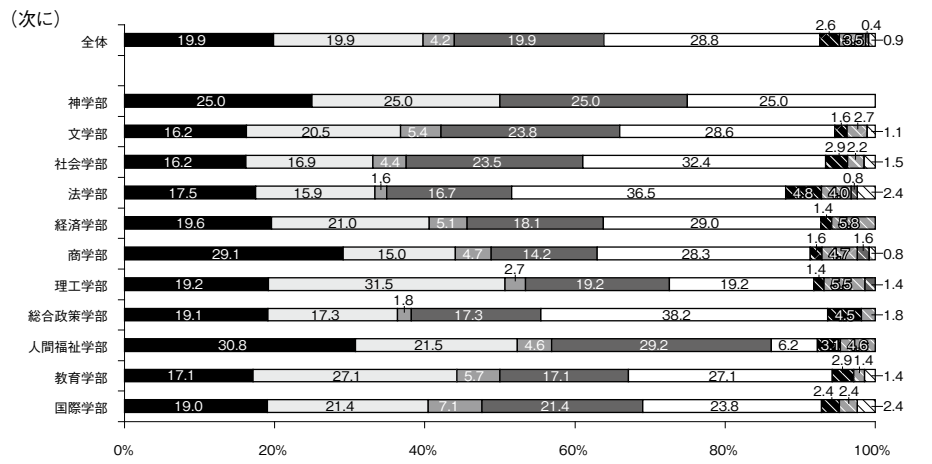
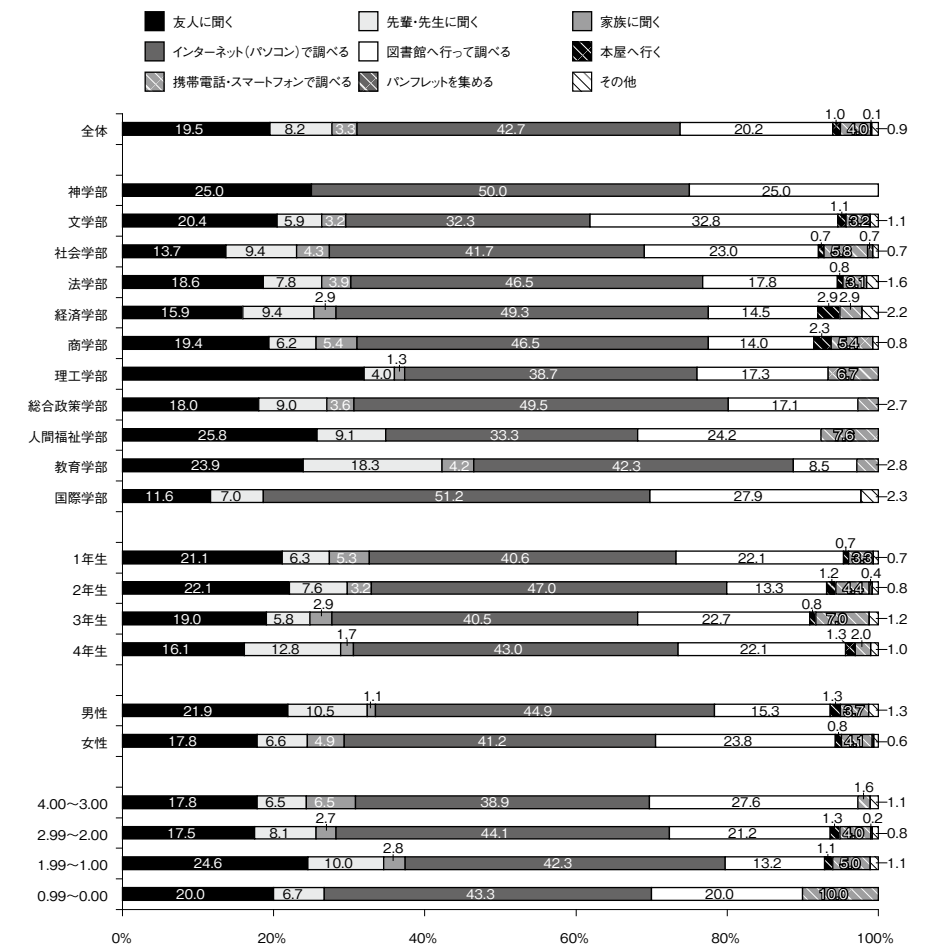


図2-8-4 情報収集法(最初に):C 試験前(Q17)

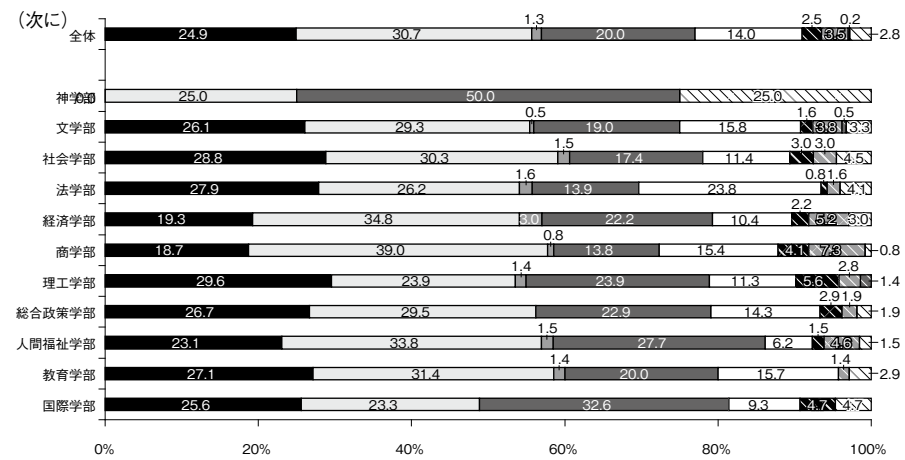
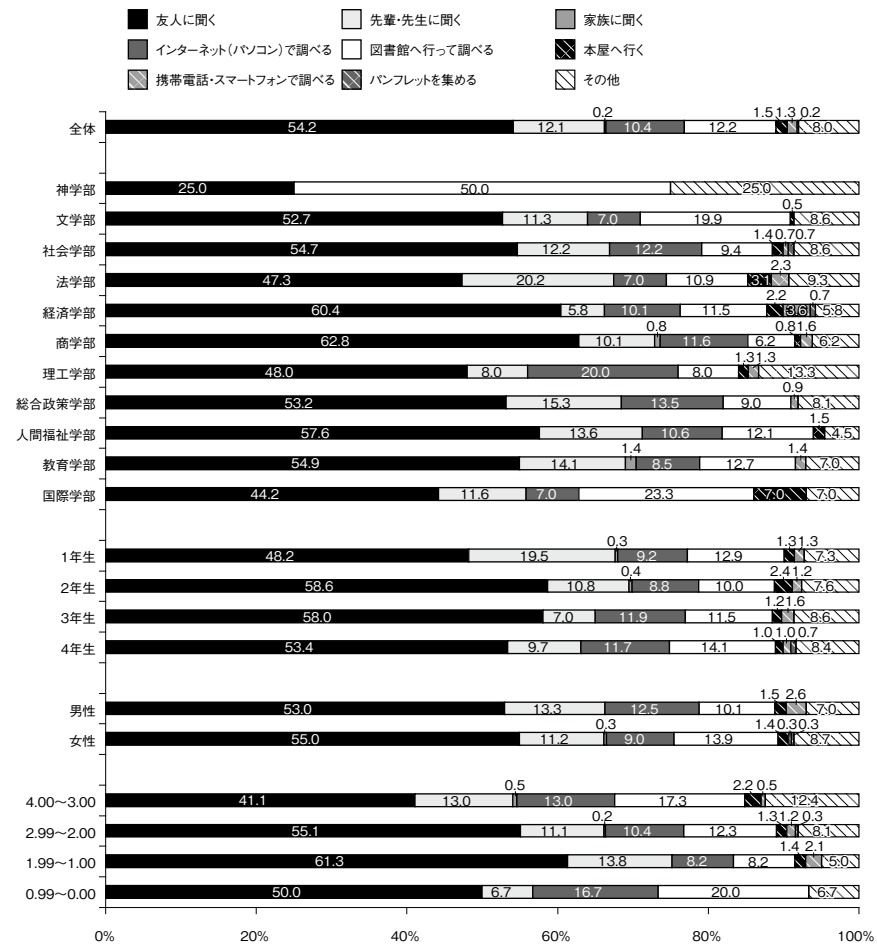


図2-8-5 情報収集法(最初に):D 趣味に関すること(Q17)

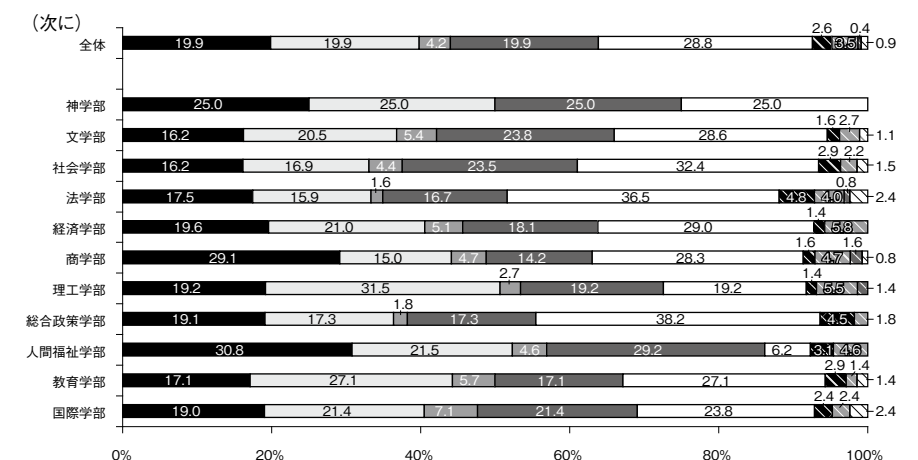
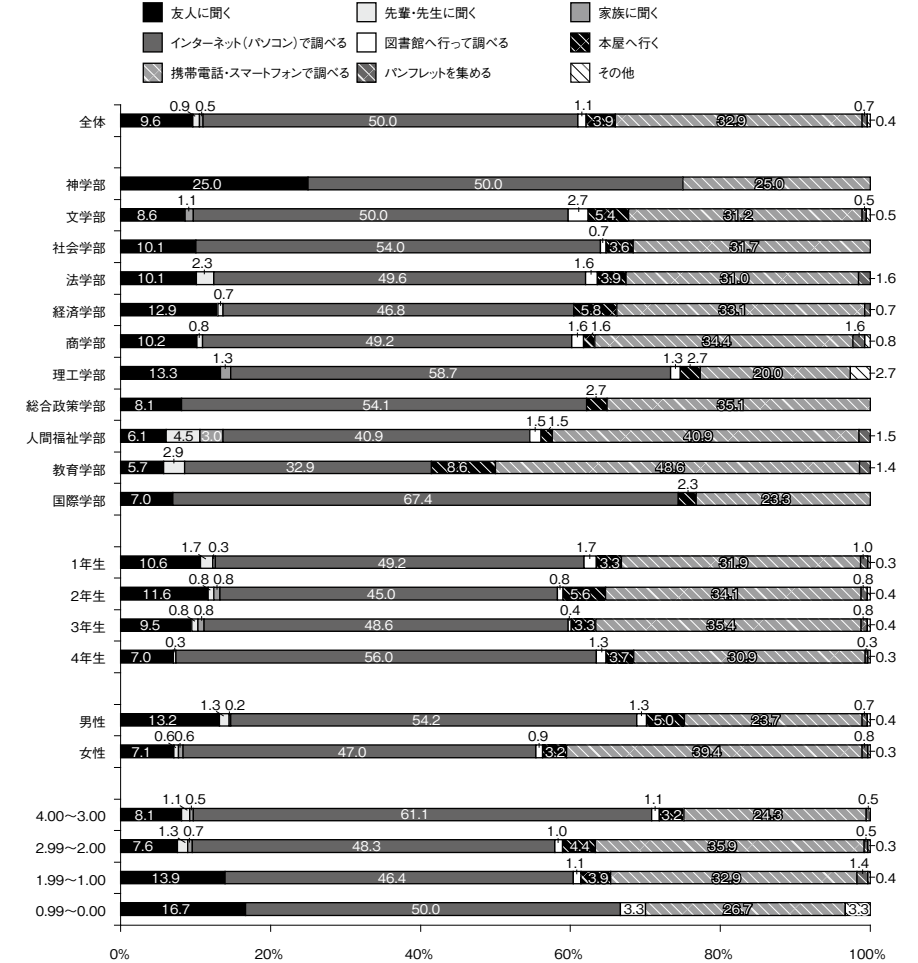


図2-8-6 情報収集法(最初に):E コンサート・イベント(Q17)

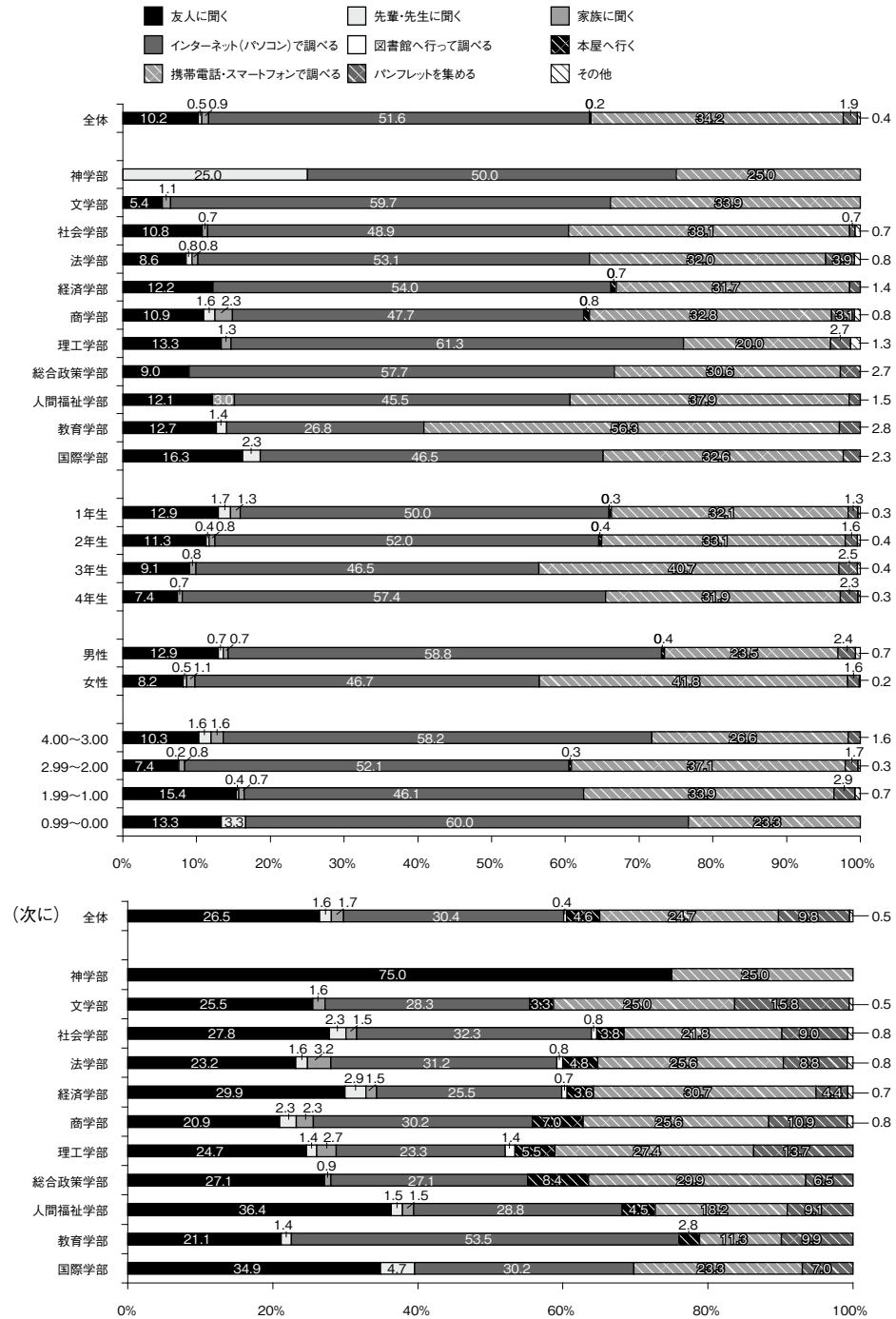


図2-8-7 情報収集法(最初に):F 未知の所に行く(Q17)

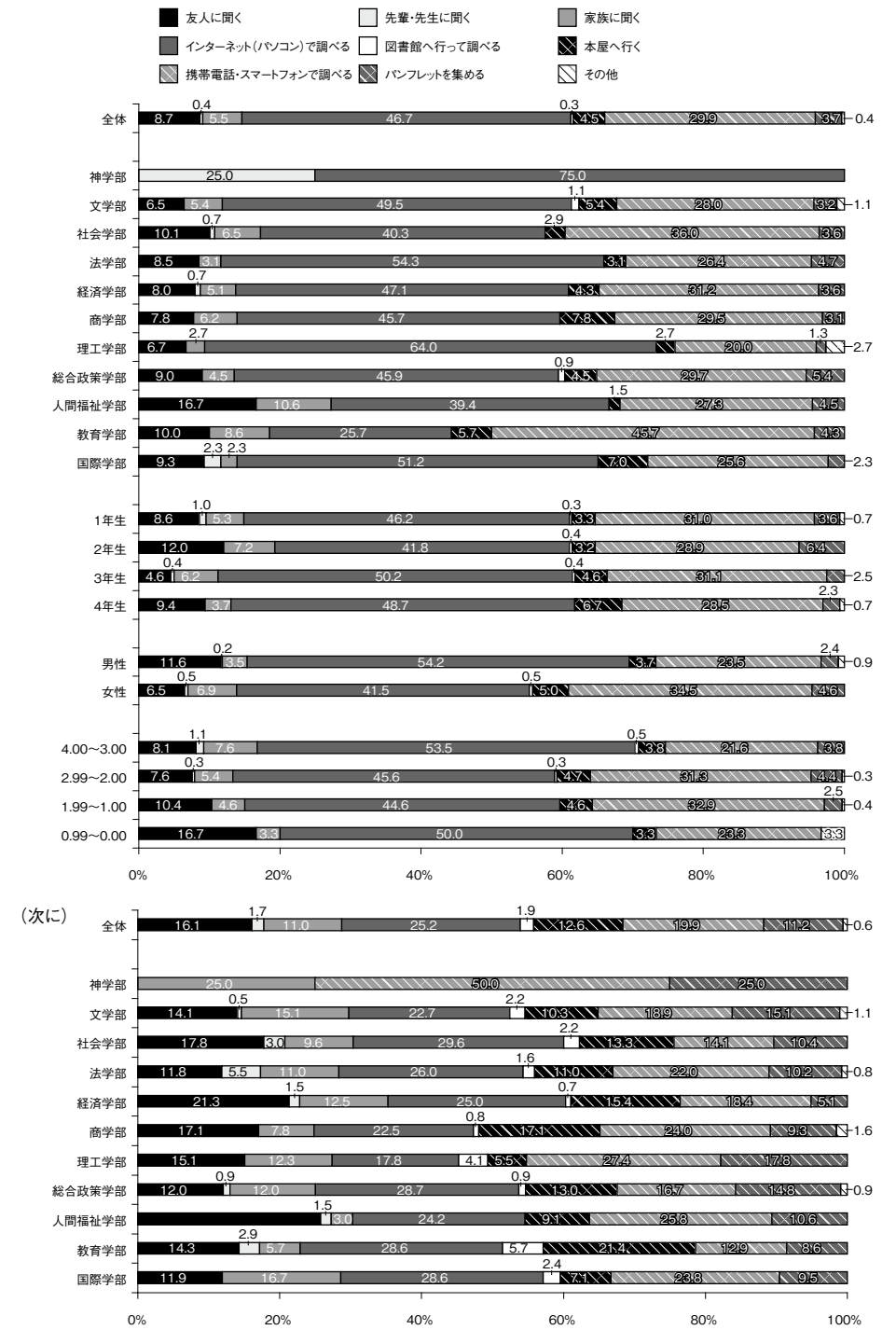


図2-8-8 情報収集法(最初に):G 旅行をする(Q17)

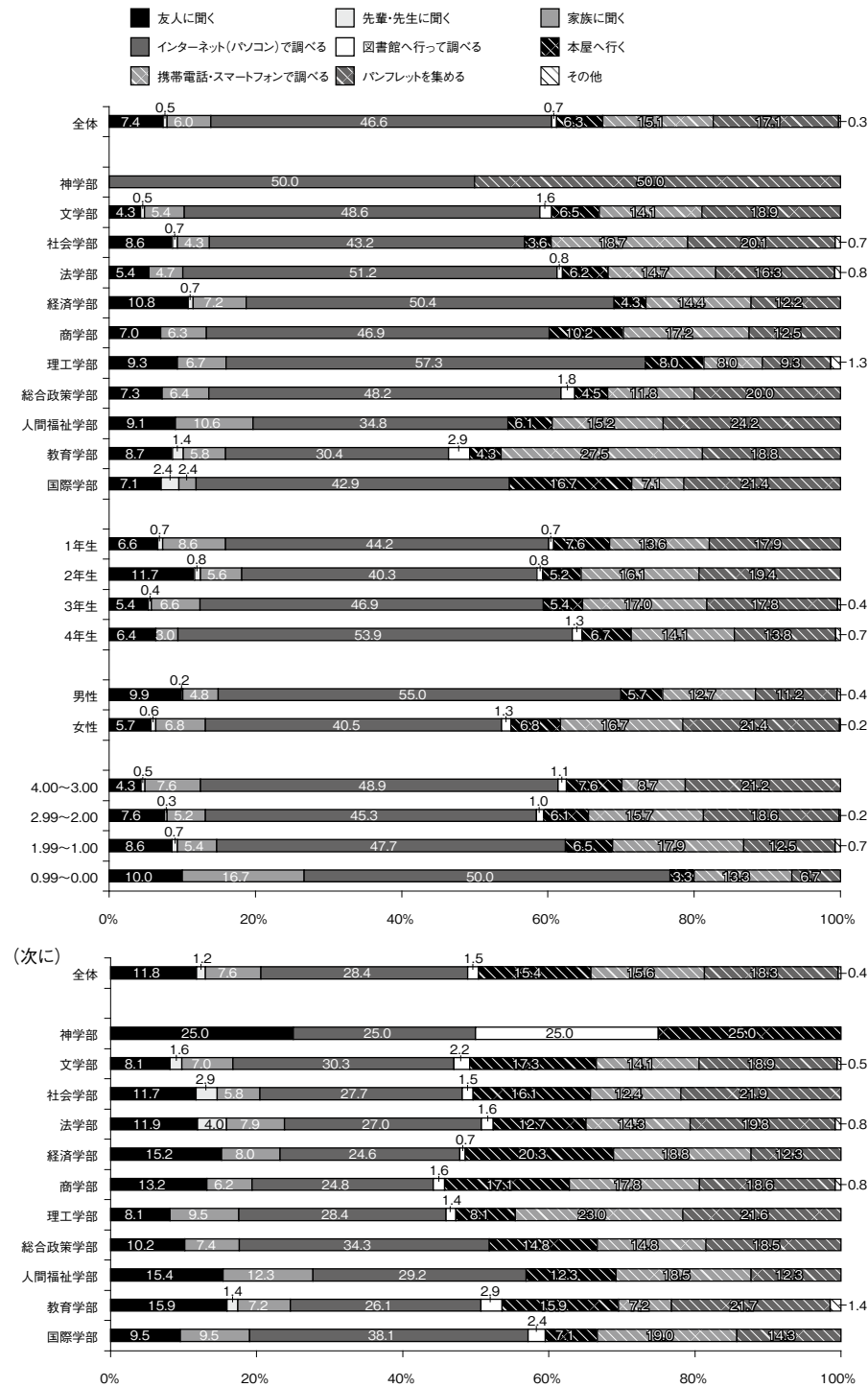


表2-1 PレポートとSレポートと学部4分類のクロス表

学部4分類	次に	次に				合計	
		友人	先輩先生	Net&PC	図書館		
神・文学部	最初に	友人	度数	6	9	9	24
		Pレポートの%	0.0%	25.0%	37.5%	37.5%	100.0%
		総和の%	0.0%	3.5%	5.3%	5.3%	14.0%
		先輩先生	度数	0	5	4	9
		Pレポートの%	0.0%	0.0%	55.6%	44.4%	100.0%
		総和の%	0.0%	0.0%	2.9%	2.3%	5.3%
	Net&PC	度数	5	1	1	53	
	Pレポートの%	9.4%	1.9%	1.9%	86.8%	100.0%	
	総和の%	2.9%	.6%	.6%	26.9%	31.0%	
	図書館	度数	10	9	66	85	
	Pレポートの%	11.8%	10.6%	77.6%	0.0%	100.0%	
	総和の%	5.8%	5.3%	38.6%	0.0%	49.7%	
合計	度数	15	16	81	59	171	
Pレポートの%	8.8%	9.4%	47.4%	34.5%	100.0%		
総和の%	8.8%	9.4%	47.4%	34.5%	100.0%		
教育学部	最初に	友人	度数	5	10	4	19
		Pレポートの%	0.0%	26.3%	52.6%	21.1%	100.0%
		総和の%	0.0%	7.4%	14.7%	5.9%	27.9%
		先輩先生	度数	2	0	0	2
		Pレポートの%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
		総和の%	2.9%	0.0%	0.0%	0.0%	2.9%
	Net&PC	度数	7	1	3	22	
	Pレポートの%	31.8%	4.5%	13.6%	50.0%	100.0%	
	総和の%	10.3%	1.5%	4.4%	16.2%	32.4%	
	図書館	度数	7	2	16	25	
	Pレポートの%	28.0%	8.0%	64.0%	0.0%	100.0%	
	総和の%	10.3%	2.9%	23.5%	0.0%	36.8%	
合計	度数	16	8	29	68		
Pレポートの%	23.5%	11.8%	42.6%	22.1%	100.0%		
総和の%	23.5%	11.8%	42.6%	22.1%	100.0%		
社会科学系学部	最初に	友人	度数	38	91	26	155
		Pレポートの%	0.0%	24.5%	58.7%	16.8%	100.0%
		総和の%	0.0%	5.6%	13.3%	3.8%	22.7%
		先輩先生	度数	7	0	6	17
		Pレポートの%	41.2%	0.0%	35.3%	23.5%	100.0%
		総和の%	1.0%	0.0%	.9%	.6%	2.5%
	Net&PC	度数	81	17	30	241	
	Pレポートの%	22.0%	4.6%	8.1%	65.3%	100.0%	
	総和の%	11.8%	2.5%	4.4%	35.2%	53.9%	
	図書館	度数	24	10	109	143	
	Pレポートの%	16.8%	7.0%	76.2%	0.0%	100.0%	
	総和の%	3.5%	1.5%	15.9%	0.0%	20.9%	
合計	度数	112	65	236	684		
Pレポートの%	16.4%	9.5%	34.5%	39.6%	100.0%		
総和の%	16.4%	9.5%	34.5%	39.6%	100.0%		
理工学部	最初に	友人	度数	6	14	5	25
		Pレポートの%	0.0%	24.0%	56.0%	20.0%	100.0%
		総和の%	0.0%	9.1%	21.2%	7.6%	37.9%
		先輩先生	度数	1	0	1	2
		Pレポートの%	50.0%	0.0%	0.0%	50.0%	100.0%
		総和の%	1.5%	0.0%	0.0%	1.5%	3.0%
	Net&PC	度数	11	3	2	30	
	Pレポートの%	36.7%	10.0%	6.7%	46.7%	100.0%	
	総和の%	16.7%	4.5%	3.0%	21.2%	45.5%	
	図書館	度数	3	0	6	9	
	Pレポートの%	33.3%	0.0%	66.7%	0.0%	100.0%	
	総和の%	4.5%	0.0%	9.1%	0.0%	13.6%	
合計	度数	15	9	22	66		
Pレポートの%	22.7%	13.6%	33.3%	30.3%	100.0%		
総和の%	22.7%	13.6%	33.3%	30.3%	100.0%		
合計	最初に	友人	度数	55	124	44	223
		Pレポートの%	0.0%	24.7%	55.6%	19.7%	100.0%
		総和の%	0.0%	5.6%	12.5%	4.4%	22.5%
		先輩先生	度数	10	11	9	30
		Pレポートの%	33.3%	0.0%	36.7%	30.0%	100.0%
		総和の%	1.0%	0.0%	1.1%	.9%	3.0%
	Net&PC	度数	104	22	36	474	
	Pレポートの%	21.9%	4.6%	7.6%	65.8%	100.0%	
	総和の%	10.5%	2.2%	3.6%	31.5%	47.9%	
	図書館	度数	44	21	197	262	
	Pレポートの%	16.8%	8.0%	75.2%	0.0%	100.0%	
	総和の%	4.4%	2.1%	19.9%	0.0%	26.5%	
合計	度数	158	98	368	989		
Pレポートの%	16.0%	9.9%	37.2%	36.9%	100.0%		
総和の%	16.0%	9.9%	37.2%	36.9%	100.0%		

表2-2 PレポートとSレポートとGPAのクロス表

GPA		次に				合計		
		友人	先輩先生	Net&PC	図書館			
3以上	最初に	友人	度数	0	5	4	5	14
		Pレポートの%	0.0%	35.7%	28.6%	35.7%	100.0%	
		総和の%	0.0%	2.9%	2.3%	2.9%	8.2%	
		先輩先生	度数	1	0	2	2	5
		Pレポートの%	20.0%	0.0%	40.0%	40.0%	100.0%	
		総和の%	.6%	0.0%	1.2%	1.2%	2.9%	
	図書館	Net&PC	度数	14	2	2	64	82
		Pレポートの%	17.1%	2.4%	2.4%	78.0%	100.0%	
		総和の%	8.2%	1.2%	1.2%	37.4%	48.0%	
		図書館	度数	10	2	58	0	70
		Pレポートの%	14.3%	2.9%	82.9%	0.0%	100.0%	
		総和の%	5.8%	1.2%	33.9%	0.0%	40.9%	
合計	度数	25	9	66	71	171		
Pレポートの%	14.6%	5.3%	38.6%	41.5%	100.0%			
総和の%	14.6%	5.3%	38.6%	41.5%	100.0%			
3未満	最初に	友人	度数	0	32	58	26	116
		Pレポートの%	0.0%	27.6%	50.0%	22.4%	100.0%	
		総和の%	0.0%	5.9%	10.7%	4.8%	21.4%	
		先輩先生	度数	4	0	5	3	12
		Pレポートの%	33.3%	0.0%	41.7%	25.0%	100.0%	
		総和の%	.7%	0.0%	.9%	.6%	2.2%	
	図書館	Net&PC	度数	52	11	25	176	264
		Pレポートの%	19.7%	4.2%	9.5%	66.7%	100.0%	
		総和の%	9.6%	2.0%	4.6%	32.5%	48.7%	
		図書館	度数	25	17	108	0	150
		Pレポートの%	16.7%	11.3%	72.0%	0.0%	100.0%	
		総和の%	4.6%	3.1%	19.9%	0.0%	27.7%	
合計	度数	81	60	196	205	542		
Pレポートの%	14.9%	11.1%	36.2%	37.8%	100.0%			
総和の%	14.9%	11.1%	36.2%	37.8%	100.0%			
2未満	最初に	友人	度数	0	15	55	13	83
		Pレポートの%	0.0%	18.1%	66.3%	15.7%	100.0%	
		総和の%	0.0%	6.1%	22.3%	5.3%	33.6%	
		先輩先生	度数	5	0	3	4	12
		Pレポートの%	41.7%	0.0%	25.0%	33.3%	100.0%	
		総和の%	2.0%	0.0%	1.2%	1.6%	4.9%	
	図書館	Net&PC	度数	36	7	8	65	116
		Pレポートの%	31.0%	6.0%	6.9%	56.0%	100.0%	
		総和の%	14.6%	2.8%	3.2%	26.3%	47.0%	
		図書館	度数	8	2	26	0	36
		Pレポートの%	22.2%	5.6%	72.2%	0.0%	100.0%	
		総和の%	3.2%	.8%	10.5%	0.0%	14.6%	
合計	度数	49	24	92	82	247		
Pレポートの%	19.8%	9.7%	37.2%	33.2%	100.0%			
総和の%	19.8%	9.7%	37.2%	33.2%	100.0%			
1未満	最初に	友人	度数	0	2	7	1	10
		Pレポートの%	0.0%	20.0%	70.0%	10.0%	100.0%	
		総和の%	0.0%	7.1%	25.0%	3.6%	35.7%	
		先輩先生	度数	0	0	1	0	1
		Pレポートの%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%	
		総和の%	0.0%	0.0%	3.6%	0.0%	3.6%	
	図書館	Net&PC	度数	2	2	1	7	12
		Pレポートの%	16.7%	16.7%	8.3%	58.3%	100.0%	
		総和の%	7.1%	7.1%	3.6%	25.0%	42.9%	
		図書館	度数	1	0	4	0	5
		Pレポートの%	20.0%	0.0%	80.0%	0.0%	100.0%	
		総和の%	3.6%	0.0%	14.3%	0.0%	17.9%	
合計	度数	3	4	13	8	28		
Pレポートの%	10.7%	14.3%	46.4%	28.6%	100.0%			
総和の%	10.7%	14.3%	46.4%	28.6%	100.0%			
合計	Pレポート	友人	度数	0	54	124	45	223
		Pレポートの%	0.0%	24.2%	55.6%	20.2%	100.0%	
		総和の%	0.0%	5.5%	12.6%	4.6%	22.6%	
		先輩先生	度数	10	0	11	9	30
		Pレポートの%	33.3%	0.0%	36.7%	30.0%	100.0%	
		総和の%	1.0%	0.0%	1.1%	.9%	3.0%	
	図書館	Net&PC	度数	104	22	36	312	474
		Pレポートの%	21.9%	4.6%	7.6%	65.8%	100.0%	
		総和の%	10.5%	2.2%	3.6%	31.6%	48.0%	
		図書館	度数	44	21	196	0	261
		Pレポートの%	16.9%	8.0%	75.1%	0.0%	100.0%	
		総和の%	4.5%	2.1%	19.8%	0.0%	26.4%	
合計	度数	158	97	367	366	988		
Pレポートの%	16.0%	9.8%	37.1%	37.0%	100.0%			
総和の%	16.0%	9.8%	37.1%	37.0%	100.0%			

(9) コミュニケーション手段 (Q18)

Q18では、諸活動におけるコミュニケーション手段について、設問A～Eについてそれぞれ頻度の高い順に2つ選択してもらった。回答の分布を図2-9-1～図2-9-5に示す。その結果すべての設問に共通して「直接会って話す」が過半数を超えており、この点は前回調査と共通している。ただし、前回と比べ、友人とのコミュニケーションにおいて、前回選択肢になかったSNSを利用する割合が増加しており、その分、「A:親しい友人」「C:クラスの仲間」「E:ゼミ・サークルなどの仲間」では「メール(携帯・スマートフォン)」が減少している。

次に、学部別・学年別・GPA別に回答結果を見ていこう。

まず、学部別に見ると、文学部、理工学部、教育学部の非社会科学系学部において直接会って話す割合が高い。また、「C:クラスの仲間」「D:先生」に顕著に表れているように、社会科学系学部の中では経済学部と商学部でネット等の利用率の高さが、言い換えると直接会って話す割合が低い。その理由を分析することは困難であっても、何らかの背景を考察する必要はあろう。

次に学年別に見ると、学年が上がるにつれ「A:親しい友人」「C:クラスの仲間」「D:先生」で直接会うよりメール等の手段を用いることが増えていく一方、「B:家族」「E:ゼミ・サークルなどの仲間」に対しては大きな変化は見られない。これは家族とのコミュニケーション方法は入学前にはほぼ固まっている、サークルの仲間とのコミュニケーションは変化していくが3年生時にゼミの仲間が加わることにより直接会って話をする機会が増加する、などの要因が考えられる。なお、他の属性別結果は紙幅の都合により割愛する。

最後にQ17で注目したGPA別であるが、すべての設問で成績が低下するとともに「直接会って話す」の回答割合が低下することが見て取れる。またこの傾向はGPAが1未満の学生の「A:親しい友人」「C:クラスの仲間」「E:ゼミ・サークルなどの仲間」に対する回答で顕著となり、変わってメールの利用や「その他」の回答が増加する。そこでGPAが1未満の学生のうち「その他」に関する自由記述のあった7名の記述を見ると、「話さない」「関わったことがない」「連絡を取らない」「全く話さない」「スカイプ」「該当しない」「話さない」となっており、やはり直接会って話をする傾向は示さなかった。

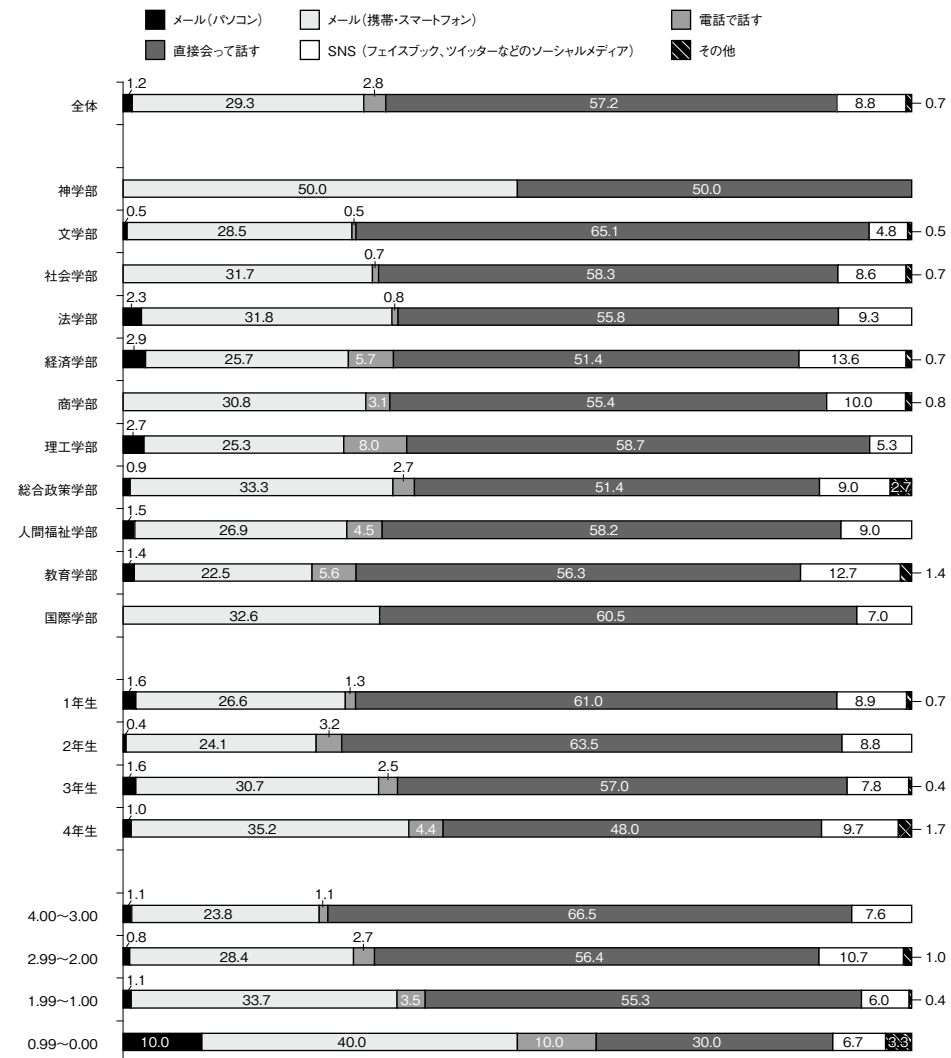
Q17で「GPAが1未満の学生は、レポートで行き詰まったり、試験前など勉学上重要な局面において友人、先輩・先生を情報ソースとする割合が低下することを確認した。この点を上記の結果

Q18. あなたは次のA～Eの人たちと主にどのような手段でコミュニケーションを図っていますか。下の1～6の選択肢の中から頻度の高い順に2つまで回答欄に番号で答えてください。その方法が選択肢の中に無い場合は「6 その他」とし、その具体的な方法を括弧内に書いてください。

- | | |
|----------------|----------------------------------|
| A 親しい友人 | 1 メール(パソコン) |
| B 家族 | 2 メール(携帯・スマートフォン) |
| C クラスの仲間 | 3 電話で話す |
| D 先生 | 4 直接会って話す |
| E ゼミ・サークルなどの仲間 | 5 SNS(フェイスブック、ツイッターなどのソーシャルメディア) |
| | 6 その他() |

を合わせて考えると、GPAが1未満の学生は日常的に友人や先輩・先生と直接会って話をする機会が少なく、ゆえに勉学上重要な局面において周囲と相談できないため、成績が低下しているとの仮説が成り立つ。もちろん、友人や先輩・先生に相談できることと高成績の間に直接的な因果関係があると言い切ることは難しいが、人間関係の構築と勉学の両方に意欲をなくしている学生が存在する可能性は排しきれないであろう。

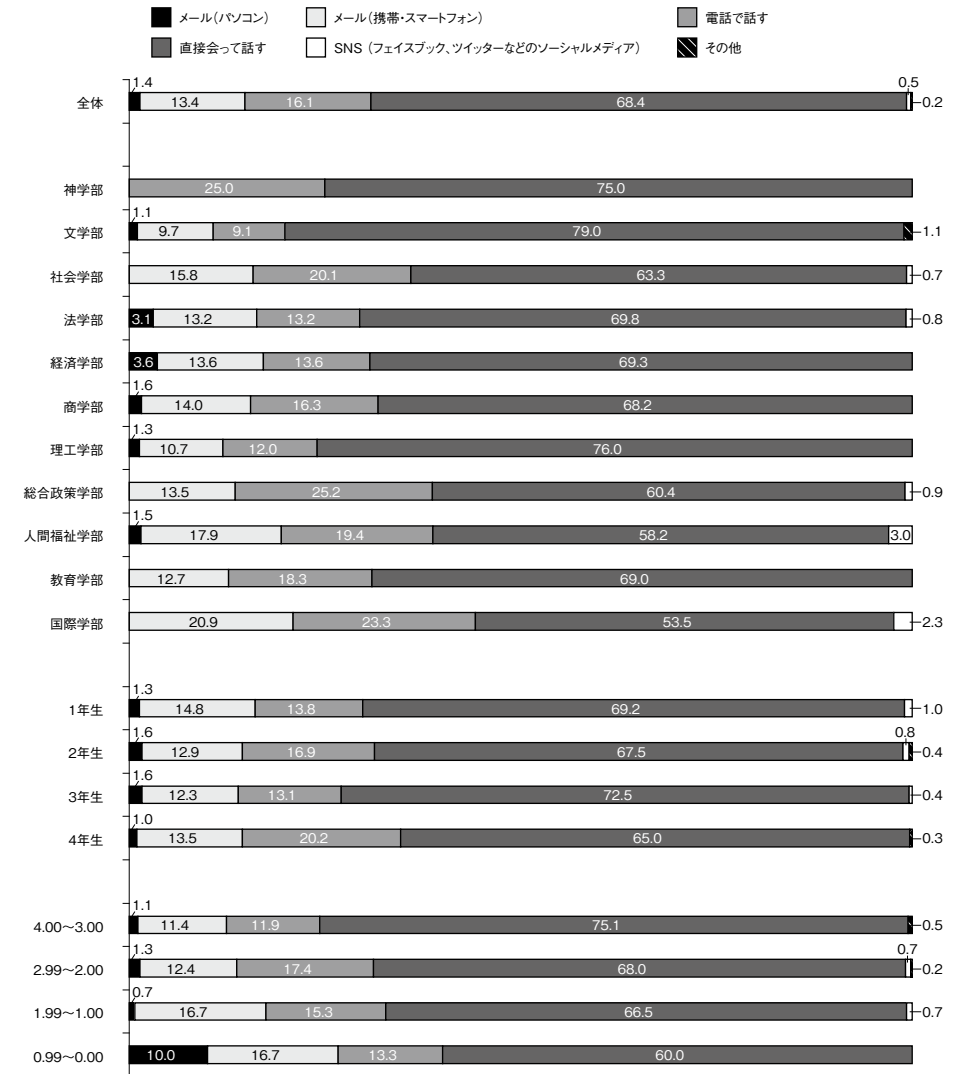
図2-9-1 コミュニケーション(1位):A 親しい友人(Q18)



コミュニケーション(2位):A 親しい友人(Q18)



図2-9-2 コミュニケーション(1位):B 家族(Q18)



コミュニケーション(2位):B 家族(Q18)

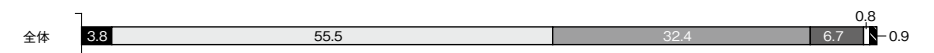
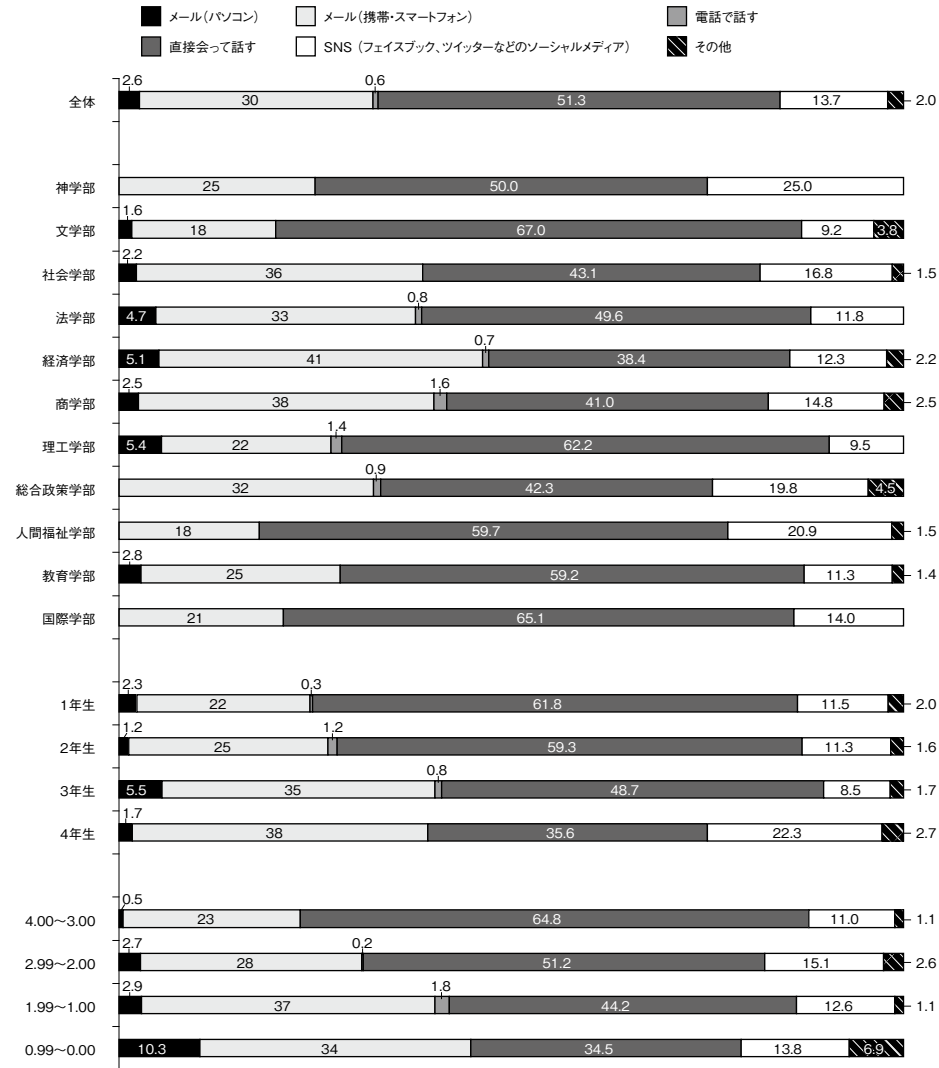


図2-9-3 コミュニケーション(1位):Cクラスの仲間(Q18)



コミュニケーション(2位):Cクラスの仲間(Q18)

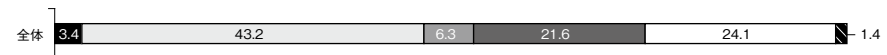
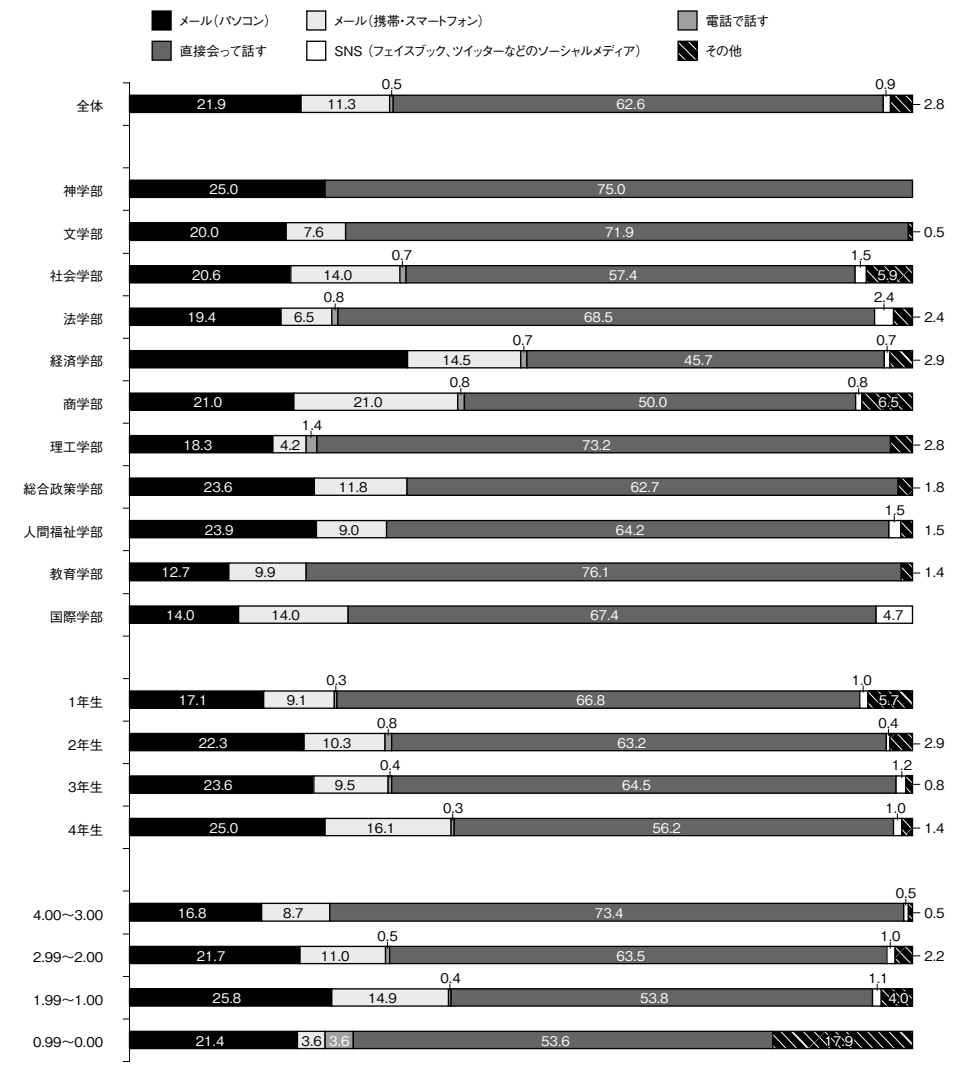


図2-9-4 コミュニケーション(1位):D先生(Q18)



コミュニケーション(2位):D先生(Q18)

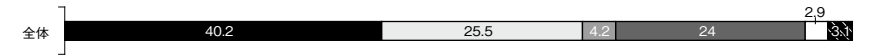
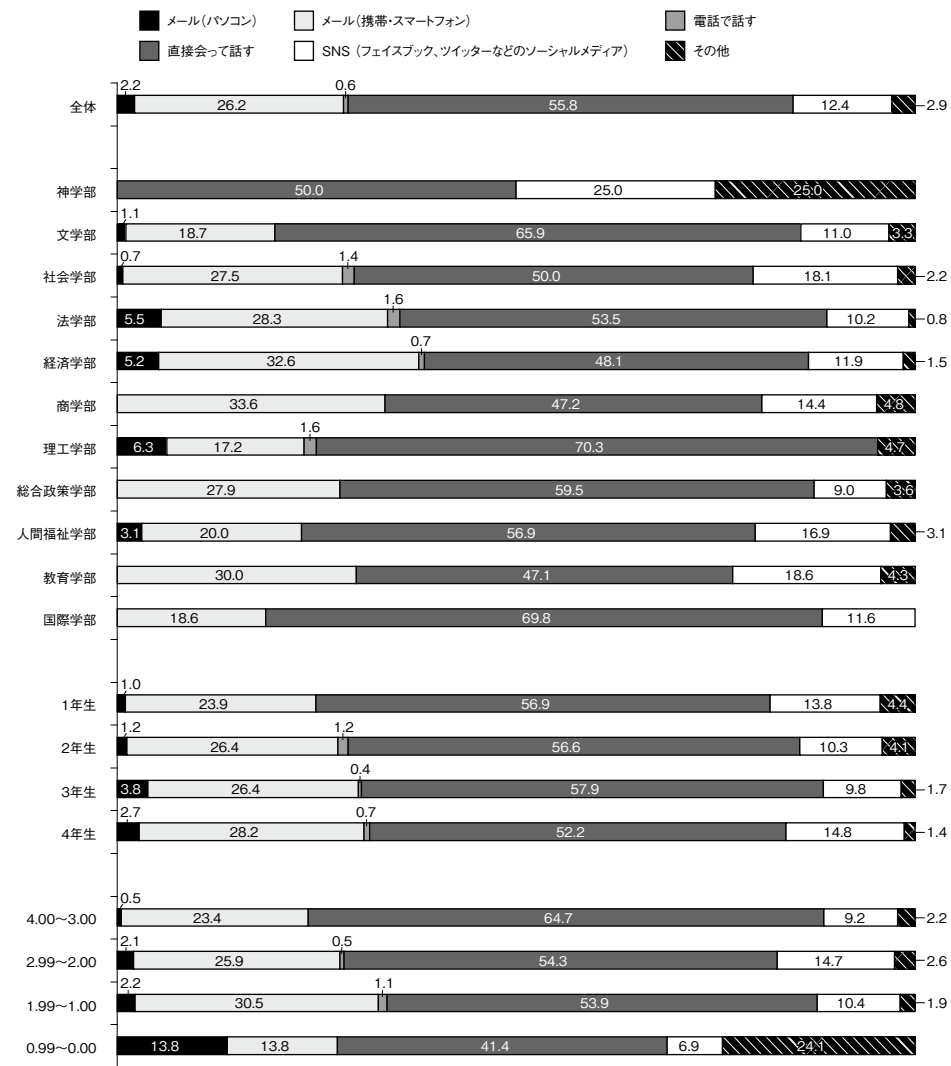
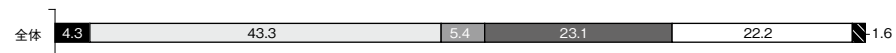


図2-9-5 コミュニケーション(1位):E セミ・サークル仲間(Q18)



コミュニケーション(2位):E セミ・サークル仲間(Q18)



大学生活の実態 のまとめ

今回の調査結果をもとに現在の大学生の大学生活の実態を検証してみたい。今回の調査での質問、「Q2:履修登録と出席状況」、「Q3:生活時間」、「Q6:諸活動の重視度」、「Q14:大学教員との接触」、「Q20:留学生や外国人教職員との接触」、「Q7:親しい友人」、「Q9:大切だと感じている人々」、「Q17:情報収集の手段」、「Q18:コミュニケーション手段」の回答からみえる。

まず履修登録と授業への出席については、2004年の第13回から今回の第17回を見てみると2004年が84.9%、2006年が87.4%、2010年89.4%に続き今回は91.6%となっており年々出席率が高くなっている。学部別に見ても若干の学部順が代わっているが総じてどの学部も出席率は良くなっている。これは学生たちが大学での学習を教室での授業を中心に考えていると思われる、また、出席する授業のうち「必修科目はすべて出席」と回答した者が全体の7割を超えており、これらから真面目な学生像を証明している。

なお、人間福祉学部、教育学部、国際学部の比較的新しく設置された学部の出席率が高くなっている。特に「必修科目はすべて出席」と回答した者が教育学部、国際学部では95%を超えており、カリキュラムの特徴や授業形態の方式など詳しく分析してみる必要があるだろう。

結果として早い学年のうちに単位を修得することができ、上級生になるにしたがい、履修登録の講時数が減少しており、就職活動等に専念しやすい条件を整えていると考えられる。

今回からGPAとの関係を見ることにしたが、「必修科目はすべて出席」と答えたものはGPAの高い学生が圧倒的に多く、GPA4.00~3.00の学生の内95.1%にも上っている。GPAが勉学に向かうモチベーションをあげるのに一役買っているのではないだろうか。

さて、学生が1週間にどのような活動に時間を費やしているのかをみてみると、やはり授業への出席が多く、20~30時間が全体で25.4%、15~20時間が18.8%、10~15時間が14.7%と10時間から30時間の授業出席者が半数に上る。これは出席率の高さを裏付けていると考える。また、これに授業関連の学習を60%近くの学生が1時間~10時間使っているようである。

次に学生がゼミナール、言語(外国語)科目、必修科目、必修以外の科目、クラブ・サークル、アルバイトの諸活動のうちどれを重視しているかをみてみると、ゼミナールについては「かなり重視」と「非常に重視」で53.5%、また、言語科目についても「かなり重視」と「非常に重視」で55.9%と5割を超えている。必修科目を重視するという者もかなりの数にのぼり、これらが授業出席率の高さを物語っている。同時に低学年からゼミへの重視がみられることから、学生にとってゼミナールが大きな意義を持っていると考えられる。

親しい友人の数とそれら友人との連絡を取り合う頻度ではここ何回かの調査で同じ傾向を示しているが、親しい友人の数は「4~6人」が34.3%、ついで「10人以上」が32.9%となっている。また、親しい友人との連絡頻度は全体で「2~3日に一度程度」が29.6%、次いで「1日に1度程度」が24.2%と5割を超えている。携帯やスマホを日常的に活用している割には少ない印象をもった。

次に、大切だと感じている人々に関する問いでは、もっとも大切だと感じている人々の1位が「家族」65.4%、2位が「出身地や出身校を共通にする仲間」31.9%、3位が「クラブ・サークルの仲